法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-03

CSR活動としての企業の環境教育(平成18年度千代田学 報告書)

田中, 充 / 長野, 浩子 / 山田, 元紀

(出版者 / Publisher)
法政大学地域研究センター千代田学プロジェクト
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
89
(発行年 / Year)
2007-03

Hosei University Repository

第4章

シンポジウム報告

CSR活動としての企業が行なう環境教育支援」

Hosei University Repository

第4章　平成18年(2006)度シンポジウム報告
「CSR活動としての企業が行なう環境教育支援」

平成 18 年度千代田学に関する調査研究の成果の一環として、千代田区及び千代田区教育委員会より協賛を得て、法政大学地域研究センターの主催によるシンポジウムが、「CSR活動としての企業が行なう環境教育支援」のテーマの下に、法政大学市ヶ谷キャンパスのボアソナードタワースカイホールにて平成 19 年 3 月 16 日に開催された。

シンポジウムの第 1 部は、平成 16 年から 3 年間にわたる千代田学プロジェクトを総括し、第 2 部は、藤川人祐千葉大学教育学部助教授が、「企業が行なう環境教育の意義と課題」のテーマで基調講演を行なった。第 3 部は、平成 18 年度千代田学で行なった環境教育の二つに実践事例報告であり、第 4 部は「企業が行なう環境教育の実践と課題」についてのパネルディスカッションを実施した。

シンポジウム開催に先立ち、法政大学地域研究センター所長 永井　進が主催者を代表して開会の挨拶を行なった。

皆さん、こんにちは。本日は年度末のご多用中のところ法政大学地域研究センター、千代田学プロジェクトシンポジウムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

ご案内のように地域研究センターは、大学がもっている研究教育の資源を社会貢献及び地域貢献のために利用したいということでつくられた組織であります。地域における支援及びまちづくり、あるいは相互支援等々のことを目的にいたしましてつくられた組織であります。毎年のように、ちょっとここに出ておりましたけれども、まちづくりのシンポジウムを、一昨年は鹿児島県大口市におきまして、昨年は夏に長野県の原村で行いました。

あるいは、いろいろなことをやっておりまして、つい先ごろですけれども、地域で研究を行っている人たちを表彰するというような制度も設けておりますし、自治体の中で非常にイノベーティブな政策を行っている自治体をお呼びいたしまして表彰する。先日も北海道、あるいは九州の方がお見えになったりしまして、そういうことをやっているところであります。あるいは、産業のクラスターがどのように形成されているかということに関連しまして研究を行いながら、国際シンポジウム等をやっております。

本日は千代田学プロジェクトということで、平成 16 年度から 3 年間にわたりましたプロジェクトの総括を行いたいということで、このような催し物をさせていただきました。もう既にご案内のとおりですけれども、平成 16 年度に千代田区からご支援いただきまして、千代田区に立地いたします主要企業の環境意識や行動調査のアンケートを行ったところから始まりました。平成 17 年度におきまして千代田区に立地する、特に本社をもっている大企業ですけれども、環境教育支援のあり方について考える。また環境教育を受け入れる学校側の状況はどういうものであるかということで、シーズとニーズをマッチングするというのがこのプロジェクトのテーマになりまして、昨年度、その成果を受けまして九

Hosei University Repository

段の中等学校におきまして、また昌平幼稚園におきまして実践のプログラムを展開したというところであります。

昨年の夏でしたけれども、私も九段中等教育学校に参りまして壁新聞づくりをみてまいりましたが、中学生の皆さんのアイデアがあふれて、環境教育というのは新しい、相当大きな発想の転換といいましょうか、そういうものが必要だなと思われるわけです。

例えば、そこに壁新聞がありますけれども、作っているのをみて驚いたのは車の屋根に、屋上緑化ではなくて車の上を緑化しようとか、非常におもしろいアイデアが出ていまして、これはある意味では非常に文明が進んだ世の中に、どういう自然環境を取り戻すというような相当ポストモダン的な発想ができる、これからの時代の人たちが育たなければならない。そういうことが非常に重要なのだなということをつくづく感じた次第であります。

おかげさまをもちまして、九段中等教育学校の壁新聞が全国のコンクールにおいて優秀賞になったということのようでありまして、うちの学生が多少お手伝いをさせていただきましたけれども、そういうこともありまして協力できたのかなということで、大学としても非常にいい企画が千代田区とともにできた。もちろん関係機関の皆様にもご協力いただいた上でできたわけで、大学としても非常によかったなというところであります。

きょうもまた環境教育のご専門の先生方が、また各NPOの方が来られておりますけれども、これからの時代、NPOのコーディネーター役といいますか、マッチング役といいますか、そういうことの役割も非常に問われているなということを認識しておりまして、今回の問題を通じて法政大学でもぜひNPOの立ち上げを考えて、今後の環境教育のあり方についてもっと突っ込んで検討していきたいと思っております。

本日は有意義なセミナーになることを祈念いたしまして、また関係各位の法政大学へのご協力、ご支援をお願いしまして、シンポジウム開会のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

本シンポジウムは平日にも係わらず、多数の企業関係者や大学生、大学院生などの参加があった。また、シンポジウム終了後の交流会でも、本日のテーマに関して参加者の間で最後まで熱心にさまざまな議論が取り交わされた。

本章第1節は、平成18（2006）年度の千代田学の調査研究報告を収載した。第2節は、千葉大学教育学部 藤川大祐助教授に「企業が行なう環境教育の意義と課題」と題して基調講演の逐語録である。第3節は、企業と学校の連携で行なわれた環境教育の事例を報告する。第4節は「企業が行なう環境教育の実践と課題」と題して、企業が行なう環境教育の実践においてわが国で先駆的に活躍されている環境教育関係者4名にパネルディスカッションをお願いした。第5節は、当日のアンケート調査の集計結果の報告である。最後の第6節は、千代田区環境土木部　山崎芳明部長のご挨拶を収録した。

Hosei University Repository

第1節　平成18年度千代田学報告

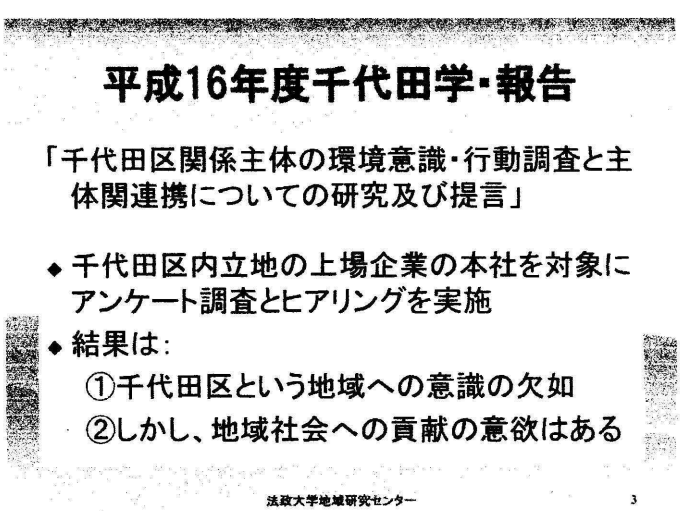
ただいまご紹介いただきました地域研究センターの山田でございます。

これから、平成18年度の千代田学のご報告をさせていただきたいと思います。本プロジェクトに対しまして、3年間にわたりまして千代田区さんから助成をいただき続けさせていただきました。まず、千代田区のご関係の皆様方に御礼申し上げたいと思います。また、本プロジェクトを行います際にさまざまなアンケート調査及びヒアリングをさせていただきましたが、千代田区内の多くの企業の皆様や、千代田区の幼稚園、小学校、そして中学校の先生たちに大変ご協力いただきできましたことについて、感謝を申し上げたいと思います。

特に今回、この後に2件の事例報告がございますが、九段中等教育学校の先生方、昌平幼稚園の先生方には大変お世話になりました。そして本プロジェクトの推進に関しましては、法政大学の大学生が3年間にわたりまして数百名にも上る協力のもとに完成したものでございます。また環境教育に関して千葉大学教育学部の、本日基調講演をしていただきます藤川先生や塩田さんには、さまざまなご助言やご支援をいただきました。ここに改めて感謝を申し上げたいと思います。そして事例作成にご協力いただきました、三菱地所の関係の皆様方、それから芸術造形研究所の皆様にも改めて御礼申し上げたいと思います。

それでは、早速、報告に入らせていただきたいと思います。千代田学プロジェクトは3年間にわたりまして調査研究を進めてまいりましたが、3年間にわたり一貫したテーマは、千代田区に立地する上場大手企業の本社自体が千代田区に対してどのような環境活動あるいはCSR活動を行っているかということの調査研究であります。 それで、16年度の千代田学の調査に関しましては300社の上場企業さんにアンケート調査をさせていただきまして、その結果から、図-1に掲げている2つの点が判明いたしました。

図-1　平成16年度千代田学・報告



（企業の千代田区へむける意識）

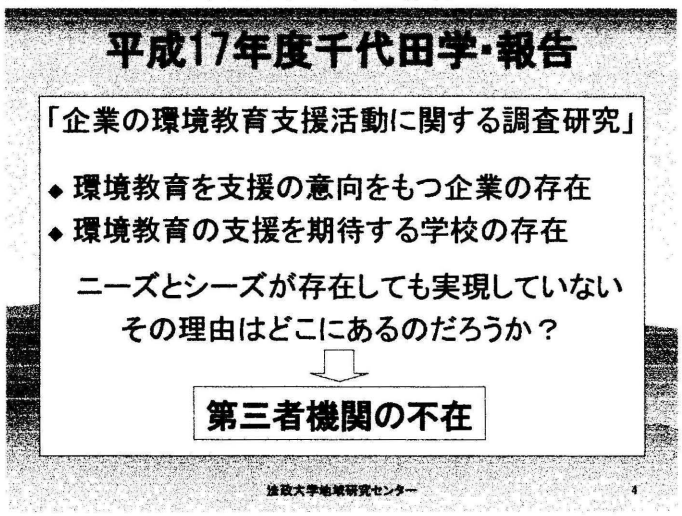
第1に、上場企業の皆さんの意識において千代田区に立地しながら、千代田区という地域への意識の欠如ということが明らかとなりました。第2に、それぞれの企業の皆さん方は地域社会への貢献の意欲があるということが、また一方で判明したわけです。

続く平成17年度の千代田学といたしましては、前年の調査から企業の数社の皆さん方が、企業の環境教育支援活動に大変

Hosei University Repository

意欲をもっているということがわかりました。そこで、平成17年度は、区内の8つの小学校の教員の皆さんにアンケート調査をさせていただきました。そして、環境教育責任者である教頭先生、8名の方にヒアリングをさせていただきました。調査の日的は企業が学校に環境教育を行うということについて、どのようにお考えになっているかということでありました。

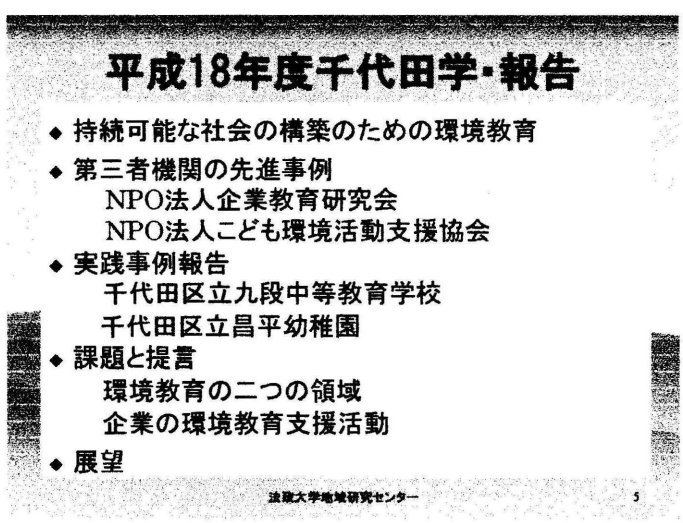
図-2　平成17年度千代田学・報告



（企業の環境教育への期待）

そうしますと、学校の先生方はぜひ企業の支援をいただきたいというような意見が多く寄せられました。しかし現実に、千代田区におきましてはそのような事例は存在しておりません。なぜかといいますと、ニーズとシーズがあるにもかかわらず、それを調整する、あるいはマッチングさせる第三者機関が千代田区には不在であることによります。

図-3　平成18年度千代田学・報告



（持続可能性の環境教育）

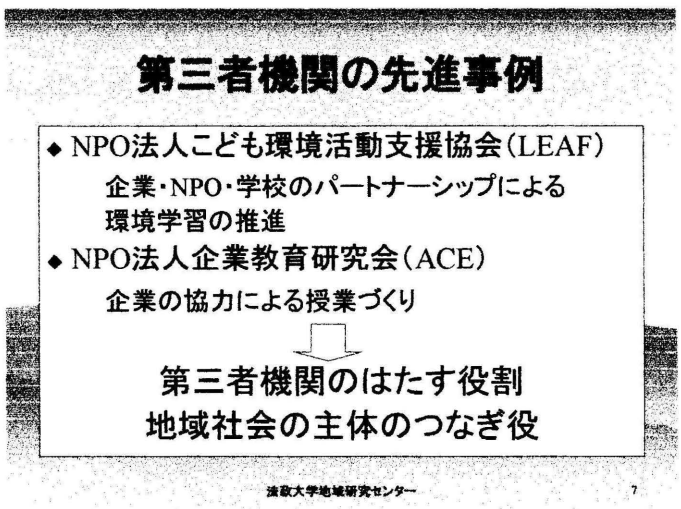
このような2年間の調査研究に基づきまして、平成18年度の研究テーマといたしましては、1点目としましては、持続可能な社会の構築のための環境教育というのはどのようなものであろうかということ。2点といたしましては、第三者機関に関する先進事例についての調査をいたしました。具体的には2つの事例について調査研究をいたしました。そして、3点目は、千代田区内において企業と学校が連携して行う環境教育の実践事例を2例つくるということを掲げました。そしてこれらの3つの視点から千代田区における環境教育の課題、またそれに対する提言、最後には千代田区における環境行政全般の今後の展望について述べていきたいと考えております。

まず1点目の持続可能な社会の構築のための環境教育でありますが、近年、温暖化など地球環境問題の解決が急務とされております。そこで国の内外ではさまざまな対策が講じられておりますが、その中で特に環境教育の充実がにわかに注目を集めております。21世紀に入りまして、世界と我が国では環境教育に関して2つの重要な政策が打ち出されまして、それぞれ持続可能な社会の構築のためには環境教育の必要性が

Hosei University Repository

重要だと述べられております。また環境教育の担い手は教育関係者のみならず、多くの主体により行われるべきであるというように示されております。

図-4　第三者機関の先進事例

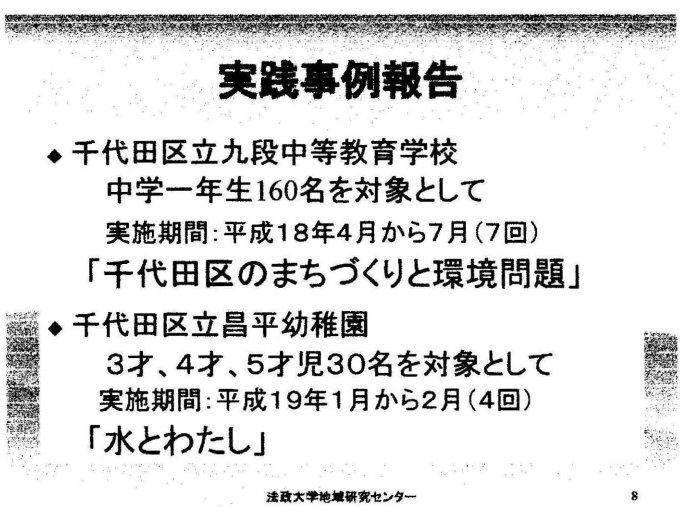


（第三者機関の必要性）

次に、第三者機関の先進事例についてでありますが、NPO法人こども環境活動支援協会「以下、LEAFという」です。これは兵庫県西宮市に本部を置いておりまして、企業とNPOと学校とのパートナーシップによる環境学習の推進ということをテーマに、盛んに活動しておられます。本日、後ほど行われますパネルディスカッションにキリンビールの山村さんにご参加していただいておりますが、このLEAFで2年間活動された方でございまして、後ほど詳しくお話があるかと思います。

二つ目の事例のNPO法人企業教育研究会は千葉大学の藤川先生が理事長をされておりますNPOでありまして、企業の協力によって環境教育づくりを盛んにやっておられます。

図-5　実践事例報告



（二つの実践事例について）

次に2つの実践事例についてでありますが、この後に報告がございますので、その中で詳しくご説明させていただきます。

最後に、これらに基づきまして課題と提言ということになりますが、持続可能な社会の構築のための環境教育には、2つの領域があることがわかりました。1つは自然環境系であり、もう1つは人間環境系であります。それと重要なこととしては企業の環境教育支援活動です。企業の行う環境教育の内容としましては、人間環境系の環境教育を行うことが肝要と考えます。そしてCSR活動の一環として、次世代の育成ということが今日では社会から大きな期待をもって企業に期待されているところであります。

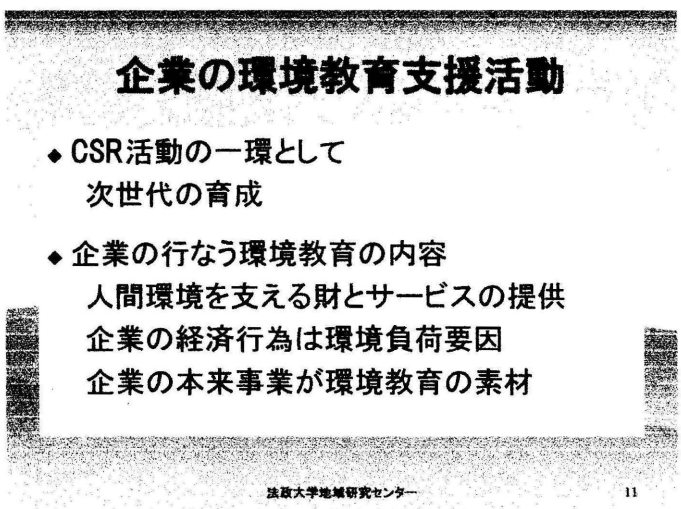
（環境教育の二つの領域）

ここで、環境教育の2つの領域について少しご説明します。自然環境系は、現在で

Hosei University Repository

は環境教育の主流となっております。しかし、人間環境系はほとんど行われていないというのが現状であります。しかし、企業の行うあらゆる経済行為はすべて環境負荷を伴い、企業はそれらの過程において、環境負荷削減の努力を日夜にわたり努力し続けておられます。そうした負荷の実態と、その削減努力などの実態などの企業の経済行為に関する実情を素材にした人間環境系の環境教育の充実は、持続可能な社会の構築のためには不可欠なものであるというように認識させていただいております。現在では、こうした面での環境教育が十分とはいえない。したがって、こうした分野の環境教育の充実は今後の大きな課題であるということがいえると思います。

図-6　企業の環境教育支援活動



（企業の環境教育への期待）

それでは、実際に企業がどのような環境支援活動を行えるかということになりますが、先ほど申し上げましたように、CSR活動の一環として環境教育による次世代の育成という側面があります。2点目としましては、企業は人間環境を支える材とサービスの提供を行い、それらを消費することにより私たちの日常生活が可能となっております。このような私たちの日常を支える企業の経済行為そのものが、すべて環境負荷要因であることは既に申し上げたとおりであります。その実態を素材として行う環境教育こそが持続可能な社会の構築に最も必要不可欠な環境教育であり、その担い手はまさに企業ということがいえます。

以上のことを踏まえまして、千代田区の今後の環境政策全般に関する展望を申し上げますと、兵庫県西宮市に1つの先進的な事例がございます。西宮市が支援して成立したNPO法人こども環境活動支援協会は、地域社会において企業と学校をつなぎ環境教育を実現させておりまして、西宮市にはNPO法人LEAFの活動によって環境教育を手がかりにして、新しいコミュニティーが生まれようとしております。実際にLEAFは、地域社会のさまざまな主体を環境教育という活動を通して社会のつなぎ役を果たしており、現代社会が直面する人類共通の課題である、環境問題の解決の1つの方策と位置づけられている環境教育が多くの主体の協働のもとに現されています。こうしたことは、主体間の連携を調整する機能をもつ第三者機関が存在しない限り、せっかく企業がもつリソースが活用されることはありません。多くの主体の協働こそが問題解決の原動力となり、その実現の過程において新たなコミュニティーが出現する可能性がみえてきます。その先駆けが西宮市ではないかと考えられます。

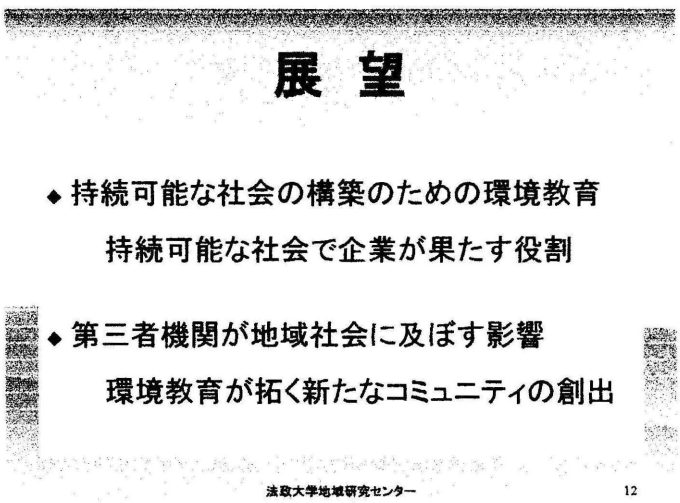
千代田区は、全国で例をみないほど特徴のある地域社会です。例えば昼間の人口は85万人、夜は4万5千人で、地域社会において最もつながりようのない主体により構成されているという特徴のある地域です。こうした地域でコミュニティーを構築する手がかりとなるのは、環境問題の解決過程に潜んでいるといっても過言ではありま

Hosei University Repository

せん。人類共通の課題の解決の過程をどのような内容のものにするかによって、千代田区が最も特色のあるまちづくりが可能となるように思われます。すなわち、それだけ大きなリソースをもった主体がこの地域に集約しているという理由によります。

従いまして、千代田区の重要な課題は第三者機関を設立することにあります。そして、ただ単に環境教育のみならず、千代田区が抱える環境問題全般を、第三者機関が行政、民間、そして大学が協働することによってその解決に各主体がかかわるということが最も大事な課題というように結論づけることができます。

図-7　展望



（千代田学の結論）

したがいまして、一日も早く第三者機関を千代田区内に実現することが、いわば千代田区の急務であるということを、3年間にわたる調査検討の1つの結論にさせていただきまして、私の報告をこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

Hosei University Repository

第2節　基調講演（逐語録）

本シンポジウムでは千葉大学教育学部藤川大祐助教授に「企業が行なう環境教育の意義と課題」と題した基調講演をいただいた。

こんにちは。藤川と申します。千葉大学の教育学部の教員をしております。私は教育方法学という、教え方の研究をしている研究者でございます。ただ、教え方といってもさまざまございます。環境教育は従来あまり教科の方で教えられていなかった点で、どのようにやろうかということも重要な研究テーマでございまして、環境教育ですとか、メディアについての教育ですとか、キャリア教育、あるいは食育といった分野についても研究をしております。

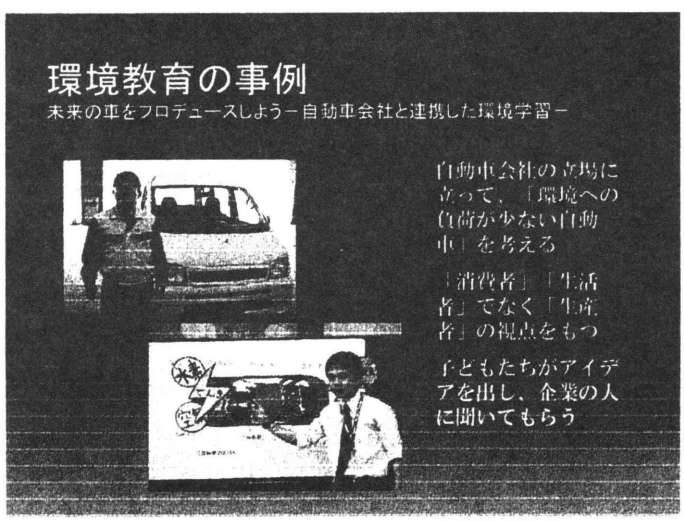
本日は、「企業が行う環境教育の意義と課題」というテーマでお話をさせていただきます。

プロフィールは、お手元の資料でお読みいただければありがたいと思います。いろいろな分野の授業づくりをしております。宣伝すると『企業とつくる食育』という本も、明日発売します。

いろいろな企業の方々と一緒に、授業づくりを行っています。先ほどもご紹介いただきましたが、NPO 法人をつくっております。企業教育研究会と申します。後で塩田真吾という副理事長がお話しさせていただきますが、簡単に申しますと、学校と企業と学生の 3 つを、NPO がつないで、企業の協力を得た授業づくりを学生の力で進めていく活動を行っております。5年ほど活動しており、これまで 100 社くらいの企業さんのご協力をいただき、この1年間だけでも 100 校ぐらいの学校で、それぞれ授業をやらせていただいております。大変量が多くて、ばたばたとしながらやっております。だれもが教育に貢献する社会をつくりたいということで、活動をしてまいりました。

宣伝ですが、お手元にある封筒の中に私どもの 2006 年度成果発表会のご案内が入っています。明日千葉大学で行います。連日で恐縮でございますが、もしご関心をもっていただけるようでしたら、食育ですとか、キャリア教育ですとか、さまざまなジャンルについてご報告いたします。今日とつなげて出ていただくといろいろなことがよくわかるのではないかと思います。

図－1　環境教育の事例 I



（企業が行なう環境教育）

環境教育ということでありますが、企業がかかわる環境教育はかなりふえてまいりました。まず幾つか事例を押さえて、その上で意義と課題についてお話を進めてまいりたいと思います。

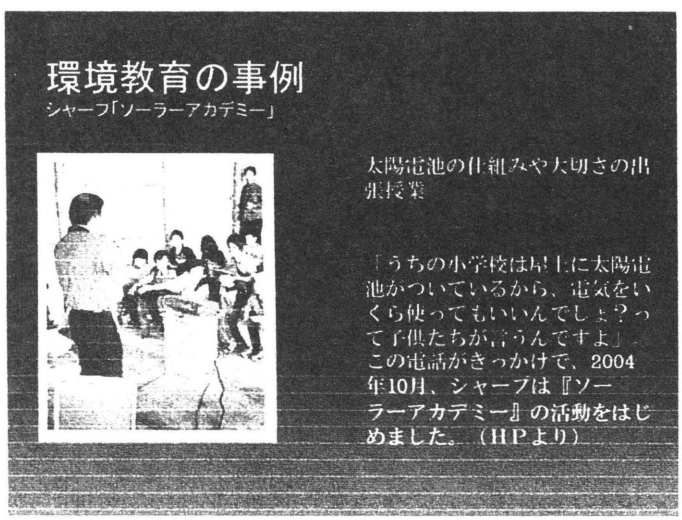
まず、これは私どもの企業教育研究会が当初、5年ほど前に実施し

Hosei University Repository

た実践でございます。後で出てくる塩田が若いころの写真がございますが、自動車会社と連携して行いました。これはダイハツさんにご協力いただいたのですけれども、自動車会社というと、環境教育ではもうすぐに悪者というようになってしまうのです。しかし私たちは自動車をある程度使う社会をつくってきているわけで、これから自動車の使用を止めようという方向でやってきていないですよね。むしろ過疎地などに行きますと、鉄道を止めて自動車にするという流れになっているわけでございます。そうしますと、自動車が存在している社会をどのようによりよいものに変えていくかということが、実践的な環境問題への対応ということになるのだろうと思います。でも学校では、自動車は良くない、環境に負荷を与えるという方向になりがちでございました。

そこで、自動車会社はどう考えているのか。あるいは自動車会社の方とともに、これからの車のある社会を子どもたちはどう考えるのかということで、環境の授業を行いました。具体的には、未来の自動車についての提案を6年生の子どもたちがいたしまして、それに対して自動車会社の方に取り組みのご紹介などをいただくということをやりました。これは非常におもしろい形でできまして、もっと企業にご協力いただいて環境教育をやりたいという思いを強くした、我々にとっては非常に意義深い実践でございました。

図－2　環境教育の事例Ⅱ



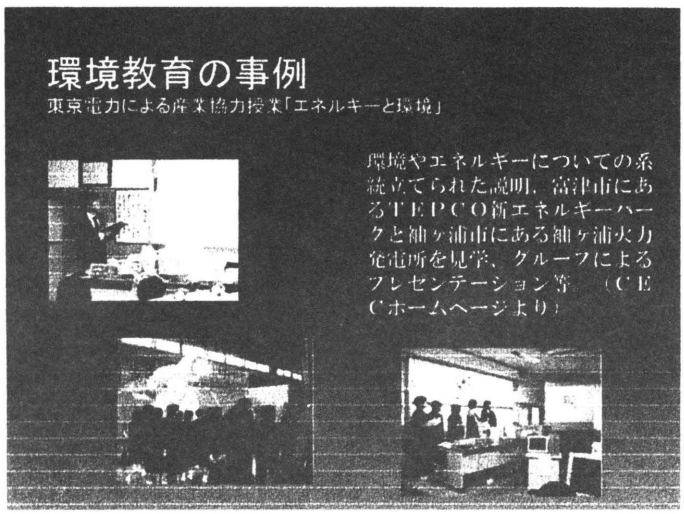
その後、いろいろな企業さんのいろいろなことをされています。その後というか、もっと前から取り組みがあろうかと思いますが、例えば、次にご紹介するのはシャープさんのソーラーアカデミーというプロジェクトです。シャープという会社は今液晶テレビでかなり名が売れているわけでございますが、もう1つ、オリジナルな面で太陽光パネルというのでしょうか。太陽光電池、太陽光での発電というものを大きなプロジェクトにされていて、さまざまな施設等に大きな太陽電池がつくようになってまいりました。これはいうまでもなく太陽光を使った発電というのは、太陽電池さえうまく作れれば非常にエネルギー効率がよい発電であり、またほかの点で環境に負荷を与えない非常に可能性のあるものでございます。

シャープさんは、この前、伺ったら、2年ほど前に学校の先生から太陽電池をつけたのはいいのだけど、その後、どうやって指導をしていいかわからない。フォローしてくれという連絡を受けたそうなのです。当時は教育についての体制が全く整っていなかったそうなのですけれども、ご担当の方は、これはいかん、売るだけで終わってはいけないのだ、学校をまわってきちんと指導しようというプロジェクトを始めまして、ソーラーアカデミーという名前で太陽電池についての指導をなさるようになりました。もう年間数百校へ行くということで体制を整えているそうです。担当者もたくさんふやして全国の学校等に回れるようにしようということのようです。さらに後でふれますが、気象予報士の方々と一

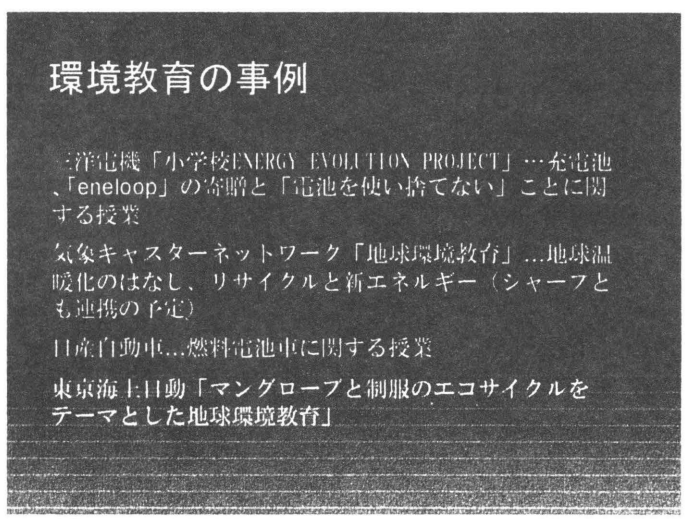
Hosei University Repository

緒に連携して授業をすることもお考えのようです。

図－3　環境教育の事例Ⅲ



図－4　環境教育の事例Ⅳ



それから、東京電力さんなど電力の会社ですとか、ガスの会社などはかなりいろいろなことをやられています。これは、ホームページからコピーさせていただきました。さまざまなことをやられていて、私どもも東京電力さんと一緒に授業をやったことがございます。

今、環境とかエネルギーについても、教育というのは当然やらなくてはいけないことだろうということで、たくさんやっております。

ほかにもいろいろありまして、私が、直接、間接に伺ったこと、あるいはホームページでみたことなどをざっと並べたのですが、例えば三洋電機さんがエネループという充電可能な電池を最近発売されていて、これ、ヒットしているのですよね。従来から充電可能な電池はあるのですが、非常に使い勝手がいい。一回充電すると充電式でない普通の電池の数倍もつとか、放置しておいても放電しないということで、すごく使い勝手がいい電池だそうなのですが、この電池を使った授業で、電池の使い捨ての問題を考えるということをやられているようです。

それから、さっきちらっといいましたが、気象キャスターネットワークという NPO がございまして、NHK の平井さんという気象予報士の方が中心になってやられているのですが、地球環境教育をやろうということもされていて、まさにシャープと一緒に、太陽光の話と気象の話とあわせてやっていくなんてことをお考えのようです。

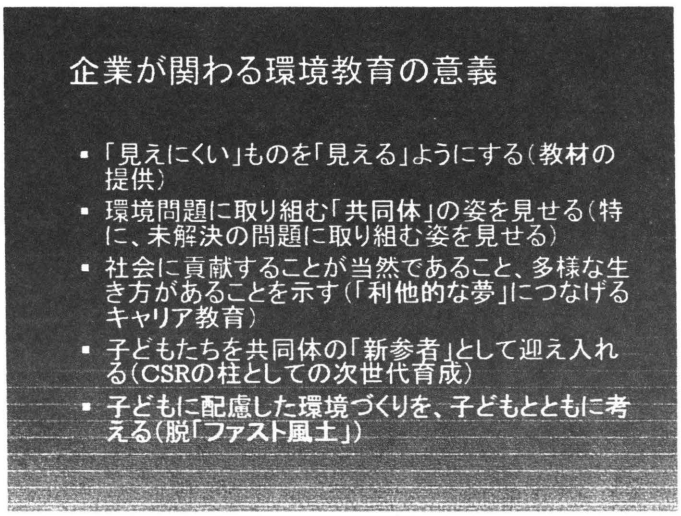
実際の事業者さん、これも我々、一緒にやらせていただいておりますが、人間と環境に関する授業などをされている。

東京海上日動さんが、マングローブと制服というのは子供たちが着る制服のエコサイクルをテーマにしたものをやっているなんていうのをみつけました。これは直接知りませんが、こんなものもある。

Hosei University Repository

（企業が行なう環境教育の意義）

図－5　企業が関わる環境教育の意義



ここから意義という話になるわけでございますが、企業がかかわる環境教育にどういう意義があるのだろうか。これはさまざまあるわけでございます。あくまでも、私は教育の立場から申し上げます。企業の立場からは、また別の方が話してくださると思いますが、教育の立場でいいますと、何といっても、まず教材を提供してやられるということはとても大きいです。いいにくいものがあります。例えば、地球環境なんていってもよくわからないということがあります。そういうものにかかわる取り組みとして、例えば発電というのはこのようにやるのだとか、こんな測定をするのだとか、いろいろなものをみせていただけるとか、あるいはグラフィックスなどでわかりやすく示していただくというのは、企業にとっては非常にお得意なところがあります。そういう教材を提供していただけるということはありがたいわけです。

ただ、それはもう当たり前なのですけれども、もっと重要なことは2番目に書きました、環境問題に取り組む共同体の姿をみせるということかと思います。学校で環境教育を、学校の先生だけでやっていますと、では一体、だれが環境の問題に取り組んでいるのかよくわからないのですよね。子どもたちがその辺を歩いていても、環境のことに取り組んでいる人というのは、せいぜいボランティアで廃品回収をしているとか、そういう人ぐらいはわかるのですが、もうちょっと地球環境につながるいろいろなことがあるはずなのですけれども、そういうものってみえにくいですよね。そうしますと、学校の先生がただ環境は大事ですよという話をしても、ちょっと遠い話に感じられると思うのです。そうではなくて、実際にこういう方が、こういう取り組みをしていますなんていうことがあって、そういう方と対話ができるということになりますと、ああ、なるほど、こういう方々が、こういう取り組みをしているのか、では、自分たちは何ができるだろうか。あるいは自分たちも将来、そういう中に入っていけるのだろうかなんていうことで、非常に近く感じられますよね。教育をやっていく上で大きな課題というのは、遠いものをどうやって近くに感じさせるかということがあるわけでございますが、近くに感じられるということが大きいかなと思います。もうちょっと具体的な話は後でいたします。

それから、もう少し一般化していいますと3番目に書きましたが、今の子どもたちって受験勉強なんかする子は、何か自分だけいい学校へ入って、自分だけいい就職をして、自分だけ金もうけをしようという発想がどうもあるのですよね。これは子どもというよりは、親の側に問題があるのかなと思います。つまり、親御さんたちが自分のお子さんに勉強しろというときに、あなたの将来の幸せのために今は頑張りなさいというメッセージを発するのですよね。しかし勉強というのは、果たして自分だけのためにやるものかと考えなくてはいけないと思います。特に高校ぐらいならまだしも、大学などに行って専門的に何か

Hosei University Repository

を学んだ人が、学んだことを自分のためにしか生かさないのだったら、それはもうもったいないというか、社会的に許しがたいことですよね。大学というのが社会にあるのは、いろいろな研究教育をして世の中をよくするということが必ずあるはずでありまして、学んだことは社会に返すのは当たり前だと私は考えますし、多くの方が、ああ、そういわれればそうだというようにおっしゃると思います。

ところが、大学生になってからそんなことをいっても遅いという面があります。幼いうちから学んだことは社会に返して当たり前なのだ、そして働くということは社会に貢献することでもあるのだということを、子どもたちに意識づけなくてはいけないはずですよね。これは我々、利他的な夢、世のため、人のためになるような夢、という言い方をしていまして、そういう夢を描けるようなキャリア教育、働くことについての教育を展開したいと思っているのです。

環境教育とキャリア教育というのは、重なる部分があると思います。さまざまな企業の方が環境への取り組みをして、社会に貢献しようとしている。その部分をしっかりみせていただいて、学んだこと、研究したこと、仕事で明らかになったこと。こういうことを社会に生かすのが当たり前なのですよということを、子どもに知ってもらう必要がある。恐らく、こういうことは子どもの一般的な学ぶ意欲につながるともいえるわけです。世のため、人のためになるように自分も頑張って勉強しなくてはという意欲につながります。自分のためだと思うと、くじけやすいですよね。自分さえよければいいなんて思っていますと、自分が大変だからやめてもいいだろうということで、実際、自分のことしか考えないでふらふらしている人もいるような気がしますよね。

４つ目なのですが、これは CSR の柱として次世代育成というものを企業の皆さんにやっていただきたいという教育の側からの願いを書いたのですけれども、これから子供たちが社会の中にメンバーとして入っていかなくてはいけないわけです。入りにくい若者が多いので、若者の就労問題というものが今指摘されていますよね。ニートが多いという問題であります。早いうちから子どもに、将来、きちんと社会のメンバーになっていって、社会を支えていくのですよという意識をもっていただきたい。そのためには小学生、中学生のうちから、もうあなたは社会の中の新参者、新しいメンバーなのですよという意識をもっていただきたい。そういう意識を育てるのが次世代育成の柱になるのではないかなと思います。

それから、5 番目に書いたのは地域環境の問題なのですけれども、今、ファスト風土社会という言い方があります。これは『下流社会』という本を書いた三浦展さんという方の言い方なのですけれども、郊外です。ここは都市ですからちょっと違いますが、郊外の風景がどこも画一化しているという指摘を三浦さんはされています。どういうことかというと、個性のあった駅前商店街などが廃れて、街道沿いに全国どこでもあるような大きなショッピングセンターが建って、その隣にガソリンスタンドか何かがあったり、パチンコ屋さんがあったりと、車で行けるような大きな施設が並んでいる。その隣には田んぼ、畑が広がっているというのが日本各地の共通の風景になっている。そういうものをファスト風土というようにいっているのです。

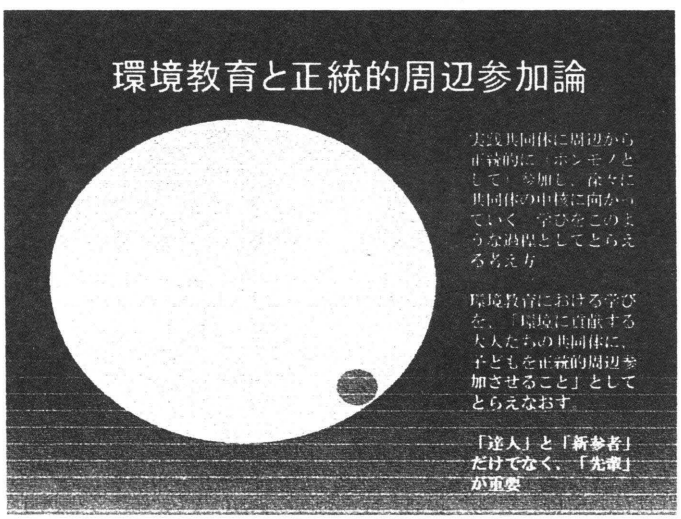
何が問題かといいますと、車で動くことが前提になっている社会ですから大人には便利かもしれませんけれども、車の運転ができない子どもにとっては何もできない社会なのです。しかも、どこでも風景が同じですから、自分のふるさとに愛着がもちにくいわけでご

Hosei University Repository

ざいます。そういう社会の中で、子どもたちを育てていいのかという問題提起がなされているわけです。これも非常に重要な問題だと思っておりまして、特にショッピングセンターの会社ですとか、自動車関係の会社ですとか、そういう方々には日本各地の地域づくりについても、社会的な責任を負っていただく必要があるのではないかということがございます。個性があって郷土に愛着がもてるような地域をつくっていくということで、環境の問題として考えていく必要があるのではないかと思います。このようにいろいろなことをやる可能性があったり、実際にやられていたりということでさまざまな意義が考えられます。

（正統的周辺参加論）

図－6　環境教育と正統的周辺参加論



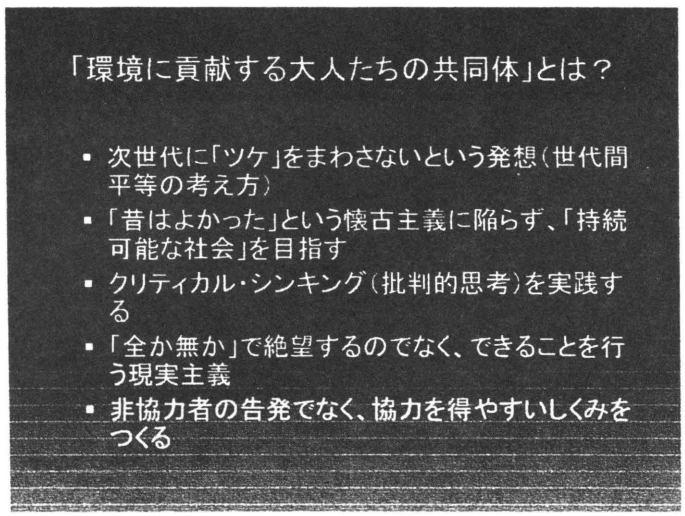
それで、ちょっと理屈を申します。学習理論で正統的周辺参加論という理論がございます。これは学校での学びというのは特殊な学びではないかという発想で、職人さんですとか、芸事をしている人の学び方から出てきた部分なのです。職人さんというのは、弟子入りしまして師匠のお世話ばかりしてなかなか本質的な仕事はできないですよね。何でもいいです。大工さんとか、料理の職人さんとか考えていただくといいのですが、例えば皿洗いから料理の修業が始まって、メニューに出るようなものをつくるには10年かかるといいますよね。その10年は何なのかということなのですけれども、最初はお手伝いをしていて、そのお店の活動だったり、会社の活動だったり周辺から参加はしているのですが、あくまでも周辺であって、そこで、その場で何が起こっているか、師匠や先輩はどのように振る舞っているかをみて、体で学んでいくということがあるわけです。そういうことを一定の期間、積み上げていく中で徐々に中心的な役割を担っていく。こういうものが学びなのだというモデルでございます。

もちろんこれだけで全部説明できるとは思えないのですが、環境の問題について、このモデルで考えるといろいろ示唆があるのではないかと思います。つまり、環境の問題でも達人のような方がいますよね。環境の問題に最前線で取り組んでおられる企業の方ですとか、行政の方ですとか、NPOの方がいらっしゃるわけです。そういう方々がいて、あるいはそこまで環境の最前線にいないけれども、環境に気を使って生活しているとか、環境について学んでいる大学生とか、いろいろな人がいる。そのまた外側に子どもたちがいると考えますと、子どもたちが大学生の姿をみたり、あるいはもっと最前線の方の姿をみたりして、自分も将来、徐々にその中心に行くのだというイメージをもつということが重要な学習であり、またここへ行くための学習がみえやすいのではないかと思うわけです。

Hosei University Repository

（環境に貢献する大人たちの共同体とは）

図－7　環境に貢献する大人たちの共同体とは？



つまり、環境に貢献する大人たちの共同体に子どもが周辺から参加して、だんだん中央に行くぞということを思っていく。そんなイメージで教育を考えていくと、結構いろいろなことがみえてくるのではないかということです。それで環境に貢献する大人たちの共同体というのは、私のイメージはこんなものなのですが、まず世代間平等というものがあります。環境の問題というのは、次の世代にツケを回してはいけないという発想があるわけです。環境倫理学で議論されていることでございますが、今はよくても、とても便利になったりいたしますが、次世代が困ってしまうようでは困る。だから、次の世代も持続可能な社会をつくっていけるようにしましょうということです。

2 番目に書いた懐古主義に陥らないというのが大事でございまして、昔は良かったとすぐ言って、昔に戻ろうというような発想での環境教育もあるのですが、これは絵にかいたもちになりやすいわけです。昔よりよくなった点もたくさんあるわけでありまして、昔のようになりたいとは、実際多くの人は思わないわけです。持続可能な社会がどうやったらできるのかを冷静に考えなくてはいけない。

3 番目に、批判的思考、クリティカルシンキングをもたなければいけない。環境の問題というのは、論理的に詰めていかなければわからないことも多いですし、また論理だけでも解決しなくて未確定なことがあるのですが、その中で考え、冷静に判断をしなければいけないなんてこともあるわけです。情緒、感情に流され過ぎないで、冷静に規範的にみていくという思考法が必要でしょう。

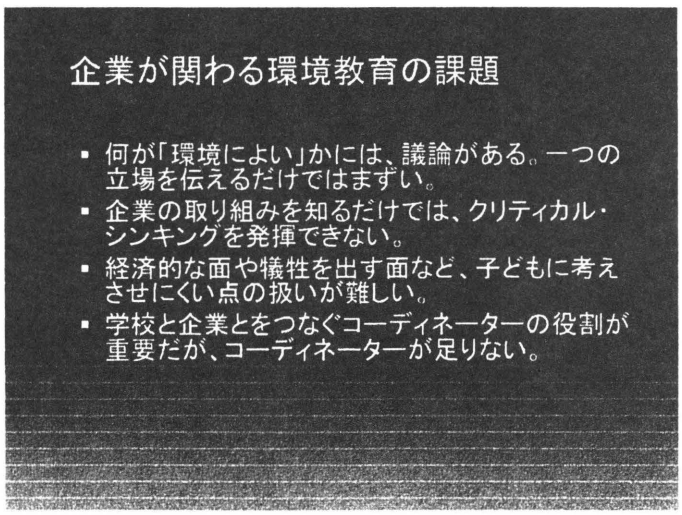
それから、オール・オア・ナッシング、全か無かという発想が強いと思うのです。今ちょっと悪いものは全部悪いというような極端な考え方があると思うのですが、そうではなくて、今できることを少しでもやっていこうという現実主義も必要です。さらに、協力しない人を告発するという後ろ向きの姿勢ではなく、多くの人に協力してもらう仕組みをつくるということです。環境の問題というのは 1 人で解決できないことばかりですから、多くの方の協力を得る必要がありますよね。そのときに、協力しない人は悪いのだといってもはじまらないので、皆さんが気持ちよく協力して下さる仕組みをつくったりするという発想も重要です。こういうことを考えたり行ったりしている人たちが環境に貢献する大人たちの共同体というものであって、そういうものに子どもたちが周辺から参加していくというのが環境教育のあり方なのではないか。そうしますと、これは学校だけではできません。学校の先生たちはこういう共同体の中心にはいないわけでありまして、企業の方、あるいは企業でなくても NPO の方とか、行政の方などがこういうものの中心にいるわけです。そういう方々の姿をみることが、環境教育では本質的に重要なのではないかと考えら

Hosei University Repository

れるわけです。

（企業が関わる環境教育の課題）

図－８　　企業が関わる環境教育の課題



最後に、課題でございます。非常にいい形で企業のかかわる環境教育というのは進んできたと思います。ここには、もちろん触れておりません。この後、出される一つ一つの事例がさまざまに工夫され、非常に魅力的なものになっていると思っておりますが、あえて課題ということを考えたいと思います。４つ書きました。

１つ目、何が環境によいかという議論がありますよね。つまり、すべてが一致して取り組もうということだけではない。例えばリサイクルはいいとよくいいますけれども、リサイクルをすることによって環境に負荷がかかったり、あるいはリサイクルがあることによって、そのものがたくさん使われて結果的に環境へのコストが大きくなったりなんてことがあります。何がいいかというのは慎重に検討しなくてはいけませんし、さまざまな立場があり得るわけですよね。ところが、企業にかかわっていただきますと、企業というのは大概何かについて１つの立場をもっていますから、果たして、その立場だけでいいかについては深めにくいということがあります。

２つ目ですが、企業の取り組みを知るだけでは批判的思考は育たない。クリティカルシンキングは育ちにくいということがございます。つまり、せっかく企業の方が来ていい話をしているのに、ここがおかしいのではないかとか、本当にそれでいいのかというと、ちょっとやりにくいですよね。むしろそれは企業の方がいないところでやった方がやりやすいかもしれません。あるいは距離を置いて、少し自分たちの考えたことについて企業の方に答えていただくという仕組みも必要かもしれません。

それから、企業の活動というのは経済的な面が必ず出てきますよね。経済的にコストが合う、合わないなんて話があります。これは学年段階によって、子どもには難しいと思います。環境の問題には百点満点の解決策がない場合が多いので、この点で残念ながら環境に負荷を与えるけど、この点はよくするのだというような判断があり得ると思うのですが、そういうことを余りストレートに出しますと、幼い子供にとっては正義感が強いですから、何だ、やはり問題があるではないかということばかりが印象に残ってしまうかもしれない。このあたりの扱いがすごく難しいと思います。理想主義的にはやりにくいということがあります。

最後に、これは後でたくさん出てくると思いますが、コーディネーター役が重要だということです。今、詳しくは申し上げません。後で出されると思いますが、学校と企業というのはかなり文化が違いますし、お互いの担っている役割も違いますし、ストレートに連携するといってもなかなか難しいわけです。そこで私どもＮＰＯなりコーディネーター役、

Hosei University Repository

第三者機関のようなものが重要になるということは、さっき山田さんもおっしゃいました。このあたりをどうするかというのが大きな課題だと思います。というように課題を出させていただいて、後の議論につないでいただけたらなと思います。

以上、早口で失礼いたしました。時間が参りましたので終了したいと思います。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

Hosei University Repository

第3節　九段中等教育学校事例報告

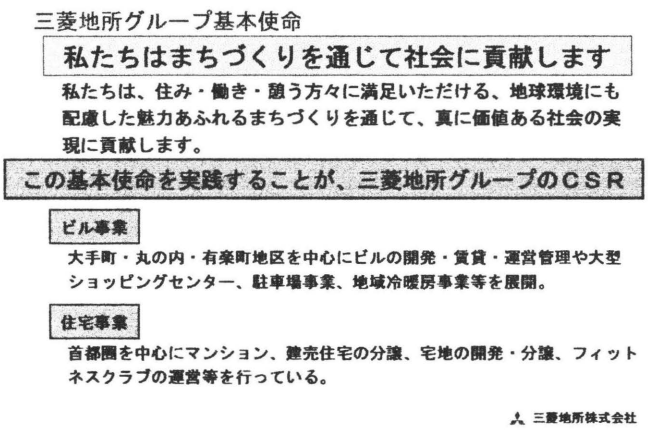
三菱地所株式会社　CSR推進部　浜谷英一副長

皆さん、こんにちは、三菱地所CSR推進部の浜谷と申します。

本日は、千代田区立九段中等教育学校で私どもが参加した環境教育の事例について、企業の立場から報告させていただきます。

今日、私の話す内容ですが、三菱地所がどういうことをやっている会社なのかをご説明したのちに今回のプロジェクトの主旨とその内容と、振り返りということと、今後に向けてというような順番でお話しさせていただきます。

1．三菱地所グループの概要



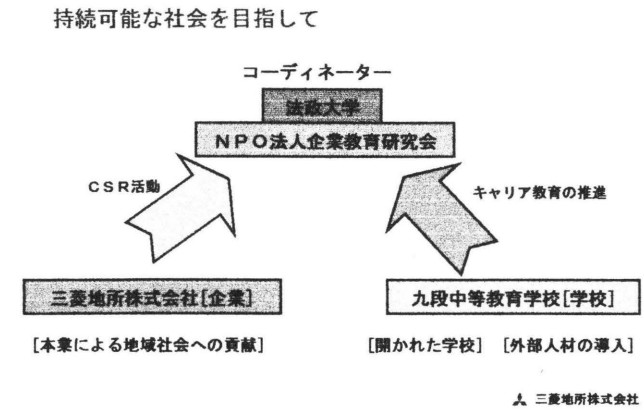
（企業の理念）

ちょっとお題目のようなことをこちらに書きましたけれども、普通、企業で経営理念的なものがございます。私どもも、実はどんなことをやっている会社かというのを下の方に入れたのですが、丸の内を中心としたビル事業ですとか、あるいはマンション開発、住宅事業ですとか、いろいろな形でのまちづくりをやっております。その中で、普通の企業でいえば経営理念的なものに当たりますけれども「私たちはまちづくりを通じて社会に貢献します」といった基本使命を定めております。

実は、私どもCSR推進部という部署なのですけれども、一昨年の4月にできた部署でございますが、会社として三菱地所グループのCSRというのはこの基本使命を実践していくことだと位置づけております。要は本業をきちんとやって、本業の中で社会に貢献していく。これを私たちのCSRであるというように位置づけております。

この辺は、どんなことをやっているかということの概要でございます。

2．プロジェクトの主旨



（プロジェクトの主旨）

私どものような企業が九段中等教育学校で今回の環境教育を実施しました。この学校は昨年4月にできたばかりで都内では初めての中高一貫の区立学校です。1学年が4クラス160名で

Hosei University Repository

すけれども、頭のいい生徒さんが集まっている学校でございます。

先ほど冒頭で山田さんからお話がございましたが、学校にとって企業の人ることの意義というのは、かなり感じているのではないかというお話があったと思います。片や、私ども企業は CSR 活動として社会に貢献していきたい。こんな会社の意向がありますけれども、企業と学校が直接結びつくことは結構難しいことであります。

そこで、我々から CSR 活動をしたいということと、あとは学校側からのキャリア教育の推進と、企業が入ることによって社会を学んでいくということがあると思いますが、そこで先ほど藤川先生の話もございましたようにコーディネーターの役割が非常に重要になってまいります。今回は法政大学さんと、それから藤川先生の NPO 法人企業教育研究会に入っていただいて、このような形で進めさせていただきました。

ここに今回の概要というものが書いてありますが、皆さんのお手元に「結環」という冊子が配付資料の中に入っていると思います。これは法政大学の学生さんが中心になりまして一生懸命まとめていただいたもので詳しく書かれた報告書です。

詳細につきましてはこちらの小冊子の方をごらんいただければと思いますが、授業の概要は昨年４月から７月まで計７回にわたって実施しました。午後の２こまの大体２時間ぐらいですが、７回実施しました。40 名が１クラスなので、中学１年生 160 名に対して、我々から「千代田区の 30 年後の環境にやさしいまち」をテーマとして考えていただくことにいたしました。生徒さんは４人１組になりまして、その班ごとに壁新聞という形で勉強した成果をまとめる。この会場のロビーに展示されておりますが、後ほど中学生の皆さんの力作をごらんいただければと思います。

３．プロジェクトの概要

期　間：2007年４月28日～７月14日　（計７回）
（毎回金曜日の午後：約２時間）
対　象：千代田区立九段中等教育学校１年生
（４０名×４クラス＝計１６０名）
テーマ：「千代田区の３０年後の環境にやさしいまち」
実現のための提案を生徒達で壁新聞にまとめ、
発表する。（４人一組の班毎に提案。）
提案のとりまとめに向け、千代田区における
環境問題の学習や現地見学、市民団体の活動
等について学ぶ。
その他：本プロジェクトは、千代田区が区内の大学機関
等に助成を行う「千代田学」の一環として実施。

三菱地所株式会社

（プロジェクトの概要）

この後で説明しますが現地を見学するなど、いろいろな形で環境問題を学んだ上で成果品にまとめていくというような形で、冒頭、山田さんからの報告にもありましたが、このプロジェクトは千代田区の助成で行なう千代田学の一環として実施しております。今回は大変多様な方々がかかわっており、私ども三菱地所がその一角を担っているだけなのですけれども、中心的なコーディネーター、それからプログラムの作成を法政大学さんと NPO 法人企業教育研究会が担当いたしまして、千代田区役所さんにも参加いただいています。特に、千代田区役所の見学も行ないました。また、まちづくりを行っている市民団体のまちみらい千代田にも参加いただきました。

これからどんな授業をやったかということを７回分についてご説明します。環境問題を学んでいただくため、最初に自分たちが日ごろから行なっている環境にいいこと、悪いことを挙げてごらん、という授業を行いました。レジ袋をもらうのは環境に悪いね、といったように具体的な行動を挙げてもらいました。ところが、環境に悪いこと

Hosei University Repository

1回目[オリエンテーション]　4月28日
（九段中等教育学校）

環境問題の基礎学習と企業からの提案

・日頃の行動の中で「環境によいこと」「環境によくないこと」を生徒達が考え、環境問題の基礎を学ぶ。
・三菱地所から「千代田区の30年後の環境にやさしいまち」を提案依頼。

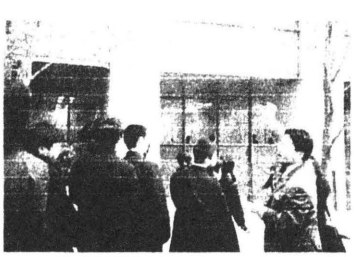
三菱地所株式会社

は大きなビルを建てること、と言った生徒さんが居まして非常にショックを受けまして、私どもの事業を否定されてしまったような感じでした。ただ、そう考えている生徒さんもいるということを認識した上で、これからどうしていったらいいかということも自分自身が考えていきました。この中で私どものやっているビル事業の概要を説明して、30年後の千代田区の環境にやさしいまちづくりを提案してごらん、ということを初回の授業でのテーマといたしました。

2回目は、法政大学市ヶ谷キャンパスのボアソナードタワーのスカイホールをお借りしまして授業をやりました。このときには、法政大学の学生さんにうまくリードしていただきました。中学生たちが千代田区の環境問題を学ぶために私どもも若干説明いたしました。私どものやっている環境の取り組みや、特に大手町、丸の内、有楽町地区でいろいろな企業が連携したりとか、行政と連携したりとか、いろいろな人が協力し合いながらまちづくりをしていることもここで説明した上で、実はこのホールのカーテンを開けると非常に眺めがいいのですけれども、そんな形で千代田区のまちをここからみていただいた。そんな授業を2回目実施しました。

3回目[現地見学]　5月19日（北の丸スクエア）
（千代田区役所）

企業、行政による環境の取り組みを見て学ぶ



・開発型証券化手法を用いて三菱地所他の出資によるSPCが開発した高層ビル「北の丸スクエア」を見学。
（案内：三菱地所）
・千代田区役所の屋上緑化と内濠を見学。
（案内：千代田区役所）

三菱地所株式会社

（現地見学の実施）

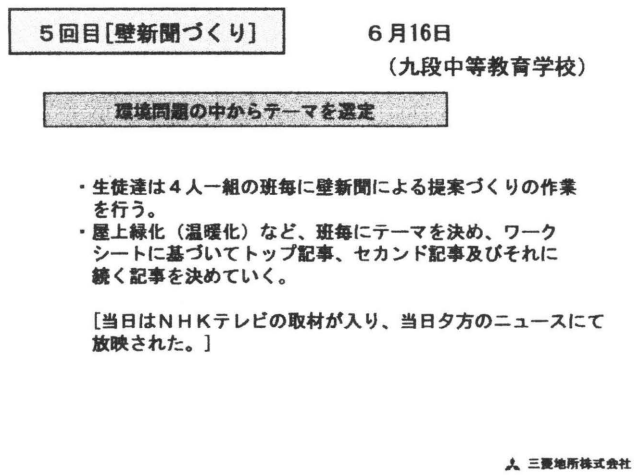
3回目が現地見学ですが、私どもが手がけた北の丸スクエアという建物が地下鉄の九段下駅のすぐ駅前にございます。本当は丸の内まで中学生全員を連れていきたかったのですけれども、なかなか移動距離があるので、昨年1月末に竣工したばかりの学校に一番近くにある北の丸スクエアの見学会を行ないました。ここでいろいろな緑化ですとか、温暖化防止のための照明の工夫だとかあるいはごみ置き場をみてもらってビル全体が協力しているゴミ分別の説明を行ないました。

それと同時に、千代田区役所も見学をしまして、実は今度新しい庁舎に移りますけれども、今の庁舎の屋上緑化の状況などについて区役所の担当の方が説明してくださいました。それとお堀が区役所の真裏にありますので、お堀についても区役所の係りの方の解説をいただきました。

6月2日に、まちづくりゲームをやりまして、ゲームのテーマは自然環境系ではなくて人間環境系的な内容のものです。最初は環境にやさしい世界のまち、例えばドイ

Hosei University Repository

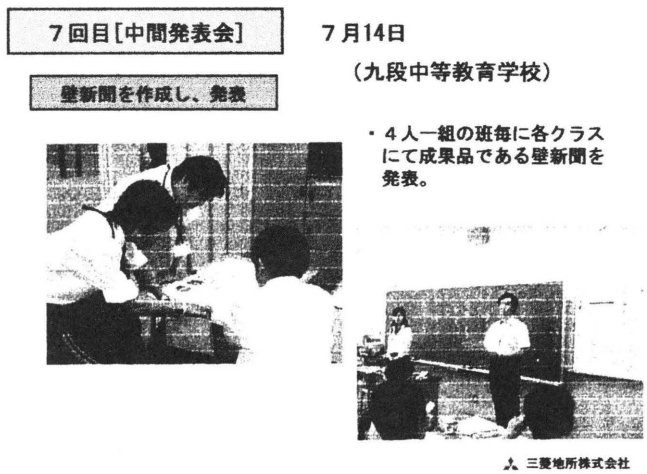
ツのフライブルクですとか、あと江戸時代にこんなことをやっていたとか、学んできたことを報告してもらった上で、まちづくりはいろいろな人がかかわっているわけでして、いろいろな考え方の人がいる。経済を重視する人とか、自然を重視する人、あるいはにぎわいを重視する人とか、安全・安心を重視する人。いろいろな人の立場になってもらってゲームをやってもらう。いろいろな価値観の人がいるのだね、ということをここで、環境から少し離れた話ですけれども、こんなことを学んでもらった。これは法政大学の学生さんが考えていただいて、非常におもしろいゲームだったと思います。



（壁新聞作成）

次に、壁新聞つくりです。今まで学んだことを壁新聞にまとめていただくような作業をやりました。この日にNHKのカメラも入りまして、夕方のニュースにも流れたということもございました。

あと、市民団体のまちみらい千代田というのがございまして、ハード・ソフトの両面でのまちづくりやコミュニティーの活性化を図っていこうという団体ですが、地域のネットワークとか連携の重要性といったことを学んでもらい、それで引き続き壁新聞づくりを進めました。



（成果発表）

最終回ですが、4人1組のチームで、それぞれの成果を発表してもらいました。この中で、そこにも張ってございますけれども、いろいろ斬新な提案というのが出てきました。冒頭で永井先生が車の緑化ということをおっしゃっていました。これは我々の考えでは思いつかないようなものでして、車の屋根を緑化してしまうとか、あるいは弁当ブリッジですが、弁当容器を再利用して何回も使っていくとか、いろいろと子どもなりの提案というのが、非常におもしろい提案が出てきております。

そして、9月16日に九段中等教育学校の文化祭が開催されました。これは学校ではなく外部のホールを借りて、中学生たちの一年間の授業と成果品を生徒さんがまとめまして舞台発表をおこないました。冒頭で永井先生からご紹介がございましたけれども、私たちが担当した一年生の生徒さんの作品が全国新聞コンクールで第1位に輝いたと聞いております。

Hosei University Repository

最後になりましたが、振り返りということなのですけれども、今回、パートナーシップということでいろいろな方々がこのプロジェクトにかかわりました。法政大学、NPO法人企業教育研究会と三菱地所、千代田区、まちみらい千代田といろいろな方がかかわって連携し合いながらやった。特に30名を超える大学生のみなさんが毎回の授業に参加していただきましたが、これは非常に特筆すべきすばらしいことがあったのではないかなと思います。

４．プロジェクトの振り返り

[パートナーシップ]
・法政大学、ＮＰＯ法人企業教育研究会、三菱地所、千代田区、まちみらい千代田といった多くの関係者の連携のもとに実施された。特に３０名を超える学生が授業の進行・サポートに参加したことは特筆すべきことである。

[企業の参加]（学校側から）
・企業が入ることで子ども達も普段の授業にはない新鮮さを感じた。自分の目で見たり触ったりすることで、学校の教師の授業とは異なる新鮮さがある。

三菱地所株式会社

（振り返り）

その後、今回のプロジェクトについての反省会で、学校の先生からも企業が入らないでやっているのと比べると、やはり企業が入ることによって子どもたちが授業にたいして新鮮さを感じ取り、普段の授業ではないものを感じることができたのではないか、という意見が先生側からだされました。特に私どものビルに連れていきましたので、実際に自分の目でみて、あるいはさわってみる。あまりさわるわけではないのですけれども、間近にみて環境の取り組みを感じる。この辺が子供たちにも新鮮となったのではないかなというお話を受けております。

私どもの立場からなのですけれども、私どもと千代田区で大きなまちづくりをやっております。丸ビルが2002年にできまして、その後、大体年に1棟ぐらいのペースで高層ビルを建てております。この4月に新丸ビルというものができますけれども、千代田区で大きなまちづくりをやっている企業として、地域社会への貢献というものもございますし、藤川先生のご説明にもありましたように、子どもたちに企業が教育をになうことによって社会教育となり、子どもたちにも学んでいただいて、子どもたちも成長してから環境に取り組む社会になる。長い目でみていろいろな形の意義があるのではないか。私ども今回、本業にかかわるところで参加できたというのがポイントなのではないかなと思います。

[企業の立場で]（三菱地所から）
・千代田区にてまちづくりを行う企業の立場からＣＳＲ活動の一環として参加した。本業に関わることで地域社会に貢献することがポイント。
・今回の授業には他部署へも協力を要請した。ＣＳＲ活動はＣＳＲ担当部署のみが行うものではなく、会社として行うものであるという意識付けにもわずかながら貢献した。
関係部署：ＣＳＲ推進部、都市計画事業室、資産開発事業部、㈱三菱地所設計、㈱三菱地所プロパティマネジメント

三菱地所株式会社

（企業の立場）

それと社内的なことなのですけれども、私どもはCSR推進部といいまして企業の社会的責任を推進していくという部署なのですが、CSR活動というのは私どもの部署だけがやればいいのかというと、そうではなくて会社を挙げてやっていかなければいけない。実は今

Hosei University Repository

回のプロジェクトにはいろいろな部署の人間を引き込みまして、私ども以外に、ここに小さい字で書いたのですが、都市計画事業室といって、いわゆるまちづくりをやっている部署です。大手町、丸の内、有楽町地区のまちづくりをどうしていこうか。こういったことを担当している部署でして、あと資産開発事業部というのが北の丸スクエアを担当している部署です。それから、グループ会社になりますけれども三菱地所設計は北の丸スクエアを設計した会社でございまして、もともと一緒の会社でしたが数年前に分社化をしております。それと、三菱地所プロパティマネジメントというのは北の丸スクエアのビルの管理をやっている会社。ここもいろいろ動線を確保したり、子どもたちにどのように通ってもらったら安全かとか、そんなことも検討してもらって一緒になってプロジェクトをやった。こういうことで社内的にも会社を挙げてやるのだという意識づけが、ほんのわずかでありますけれども、できたのではないかなと考えております。

5．今後に向けて

[今回の反省から]
- **プログラム作成にあたっては、全体ビジョンを明確にし、関係者で共有することが必要。**
- **コーディネーターの役割が重要。**
- **学校側、関係者の役割分担を明確にしておくことも肝要。**

[「都市文化」授業への協力]
- **2006年10月～2007年２月に、九段中等教育学校による「都市文化」授業に三菱地所として協力。**
- **千代田区内各企業に４人一組で子ども達が訪問し、企業から与えられる課題に対して提案をまとめる。**
- **三菱地所は、①丸ビルMARUCUBEの活用方法、②新しいマンションの企画について課題を与え、提案を依頼。**

三菱地所株式会社

（今後の課題）

最後に、今後に向けてということなのですけれども、反省的なものをちょっと書きましたが、プログラム作成に当たっては全体的なビジョンを明確にして担当者間で協力していく。今回決定から実施まで短期間でしたから、かなりスピーディーに進めてきましたが、全体的なビジョンの構築などが十分にできなかったのではないかという反省もございます。やはりコーディネートの役割というのが非常に重要だと思います。それと、学校側の役割分担などを当初から確認していく必要があるのではないかといったことも感じました。

最後に、環境教育は学期の上期で終わったのですけれども、九段中等教育学校での下期の取り組みをちょっとご紹介させていただきますと、この学校では千代田区内の企業とか、あるいは在外公館とか、いろいろなところに協力を求めた授業をやるなど非常に意欲的な学校です。下期に都市文化というテーマで、千代田区内のいろいろな企業に生徒さんが出かけていって、その企業がやっていることを学んで、生徒さんにテーマを与えて、生徒さんに考えさせる。こんな授業もやっていまして、こちらにも4人1組のチームで2チームを受け入れました。実は30社ぐらい協力しているようなのですけれども、私どもはビル事業ということで、丸ビルの1階にMARUCUBUEと言う吹き抜けの大きな広場がございます。そこに連れていって、ここの活用方法を考えてごらんというのと、あとマンションを企画している住宅事業のチームがございまして、モデルハウスに連れていって、子どもたちに新しいマンションの企画を考えてもらう。どんな部屋が欲しいのか、そのようなテーマを与えました。

丸ビルチームの方は、アンケートをとったそうなのですけれども、例えば地方名産品のショップをやるとか、あるいは有名人のサイン会、握手会をやるとか、スポーツイベント、動物との触れ合いといったことに使えるのではないかという提案もありま

Hosei University Repository

した。

あとマンションなのですけれども、マンションに欲しいものは何ということで自動販売機が欲しいとか、ちょっと意外なのですが、あと図書館が欲しいとか、自然が多い庭が欲しい。このような提案がありまして、1人になることができる空間が欲しいとか、あるいは友達と安全に過ごすことができる施設が欲しいとか、何となく今の世相を反映しているのかなというような答えが出てきました。こんなことで実は今週の月曜日に学内で、このテーマについての発表会があったようでございます。

以上で、私の発表を終わらせていただきますけれども、最後に、今回いろいろお世話になりました法政大学地域研究センターの皆様、それと学生の皆さん。それからNPO法人企業教育研究会の藤川先生と塩田さんを初め、多くの方。それから千代田区、まちみらい千代田の方、もちろん九段中等教育学校の先生方。いろいろお世話になりまして、この場をかりましてお礼を申し上げて私の発表を終わりたいと思います。どうもありがとうございます（拍手）。

Hosei University Repository

第４節　昌平幼稚園事例報告

報告者：株式会社芸術造形研究講師　安田康彦（彫刻家）

ただいまご紹介いただきました安田と申します。昌平幼稚園においての環境教育に関する報告をさせていただきますが、まず、その前に芸術造形研究所の簡単な概要を説明させていただきます。

（企業の概要）

我が社は 1976 年、代表であります金子健二が東京芸術大学大学院当時、埼玉を拠点にしまして地域の子供たちに、自身が学んで培ってきた造形活動のノウハウを教えたいというところから出発いたしました。子供たちに、本物というものはどういうものか。本物の素材、本物の道具を通して、子供たちに１つの学びを提供したいというのが始まりでした。本物を使うことで確かな実感がで得られます。その実感を通して、子供の内側からあらわれてくる表現ということを１つの理念として続けてまいりました。その心は現在でも他の講師たちに受け継がれて、子供たちの指導に当たっております。

1976 年から 20 年ほどたちまして 1996 年、今から 11 年ほど前になりますが、子供たちに対して行ってきた活動が、認知症予防に取り入れることができるのではないかということで、大学と病院との協力を得まして臨床研究を繰り返しました。それで、なるほど、これは効果があるぞということで私どもでは、臨床美術という形で臨床患者及び認知症予防に対しての取り組みを行っております。

（臨床美術とは）

まだ皆様方に耳なれない言葉と思いますが、臨床美術というのは主に私どもが開発しました感性画を基本としています。これは人間の五感、人間の内側にある感覚を、いかに刺激していって表現させるかということであります。私どもが提案する表現活動は右脳の働きを刺激することによって、脳の活性化が図れるのではないかという考えから取り組んでまいりました。

（臨床美術の教育分野への応用）

現在では、認知症の予防やケアだけにとどまらず、埼玉県の学・民ジョイントプロジェクトという形で、春日部市の公立小学校の総合学習の時間で取り上げていただきました。ここでは福祉という切り口です。子供たちとともに、臨床美術の活動をやっておりました。これは現在も続いておりますが、高い評価を得まして、埼玉キワンスクラブから教育文化賞をいただきました。

この取り組みの延長上で、こちらの地域研究センターからお話が参りまして、幼児教育の場で、環境という切り口から何かできるのではないかということで、いろいろな先生方、学生さんの協力のもとで半年間の議論を重ね、「水と私」というテーマの取り組みに入った次第であります。

（昌平幼稚園における臨床美術の応用による実験的環境教育の実践）

「水と私」というテーマなのですが、３歳から５歳までの小さな子供たちに、どうやって環境というものを伝えていくのか。子供たちが主人公でありますから、回りにあるものはすべて環境であります。環境の中でも、特に一番身近なものは何なのかということを考

Hosei University Repository

千代田学プロジェクト環境教育

千代田区立昌平幼稚園
テーマ「水と私」

芸術造形研究所

「一滴」の水の音

えていきまして、やはり生命の里である水ではないかという結論に達しました。そこで今回、環境教育の中で、水というものを素材に、臨床美術の活動を取り入れて、子供たちと一緒に取り組んでいけるのではないかという考えでやってまいりました。では、少し写真をみながら説明させていただきます。授業は1月15日から2月5日まで4回。大概120分の授業で行いました。

（水の音を描く）

1回目の授業のテーマは、「水の音」「水の味」です。大もとの主題は、「水に気づく」ということでした。実際の授業に入る前には、子供たちが水に対してどれぐらいの認識度があるのかということを私どももなかなかつかめませんでしたので、授業の中で子供たちに水とはどんなものがあるのかいろいろ聞きました。大体の子がペットボトルに入っている水とか、蛇口をひねって出てくる水という意見が多かったです。牛乳とか、ビール、汗、涙というものでの水の認識はなかなかなかったので、極端でありますが、話の中で1つ、トマトをみせました。

（水についての意識の拡大）

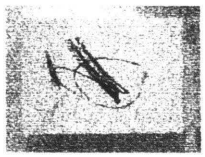
人間も、いろいろな植物も、他の生命の体内の中には水がたくさん入っているのだということをみせるために、比較としてドライトマトと生のトマト、熟したトマトをみせたのです。このときは子供の驚きがすごかったです。トマトの話から、では実際に水がどこから来るだろうという質問等もしまして、これはかなり答えに年齢差がありました。5歳の子たちになると、川とか山という答えが出るのですが、小さい子の場合は、予想していたとおり、水道という答えが多く返ってきました。水道から川、山をたどって、では大もとの水というものはどこからやってくるのだろうという流れの中で、雨というようにつながっていきました。雨の体験を振り返って、雨の感触、雨の音というところから水の音というようにつなげていきました。

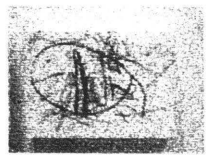
水の音というと、ふだんの生活の中では、蛇口をひねったらジャージャーと流れ去っていくものですが、授業では目をつぶって耳を澄ませて集中させるわけです。その集中した中で、じわっと自分の中に感じられる水の音というものを表現していく形をとりました。

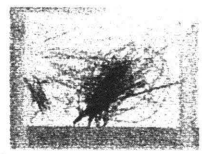
授業では3種類の水音を聞きました。これはスプーンで一滴の水をたらいの中に落としたときの情景です。一生懸命、耳をそばだてています。一滴の水の音を聞いた後に子供たちを所定の場所に戻し、感性画という手法をとりまして自分が一番感じられた音の印象を、

Hosei University Repository

3歳児の作品


1滴の水音


じょうろの水音


コップ1杯の水音

オイルパステルを使って表現してもらいました。このオイルパステルは、自社開発品で、従来のクレヨンとは違いましてかなり色の発色がよく、色の伸びもかなり違います。うっかり口に入れてしまっても害がない素材で作られているのも特長のひとつです。

これが今度、じょうろでジャーと流した水の音を聞いている風景です。同じように水の音を聞いた後、所定の場所に戻って、先ほどと同じようにこのように表現したわけです。３回目は、コップに入っている水をザブンとこぼす。その音。３種類の音を聞いて、３種類の絵を描き分けました。

（表現の言語化）

臨床美術では表現をさせるだけではなくて、今ここに映っていますように自分自身のやったものを皆で鑑賞します。自分がやったものをみて、感じたことを言葉にしてもらったり、ほかの子たちが描いた作品をみて、自分が感じたことを言うというスタイルをとっております。

そこで大切にしていることは、うまいとか下手という印象を述べ合うことではありません。ああ、ここはおもしろいねとか、ここはいい色が出ているねというような、できるだけ褒められる部分を他の子どもの作品の中にどれだけみつけられるかということに重点を置いております。人間はとかく否定することは簡単にやってのけるのですけれども、褒めるということはなかなか難しい作業です。それを小さいころから、ほかの子たちがやったことを認め合うという時間をとることは大切ではないかと思いまして、昌平幼稚園の子たちにもやってもらいました。

これが実際に３歳児がやった３種類の水の表現ですが、アートというものはなかなか理解されない分野でして、なぜかというと、物事をみるときに人は理屈で考えがちです。何を表現しているのだろうといったところから入るので、なかなか理解できないのかなと思うのですが、これは子供が直感的に感じた絵です。彼らなりにかなり実感した、そのときの気持ちとか、何か楽しかったのか、驚いたのか、そういった感情のうごめきを絵から読み取っていただければいいかなと思っております。そのことが感性画の１つの主軸になっております。入り口を出られましてロビーの左手の方に実際の作品を数点飾っておりますので、後ほどごらんになってください。

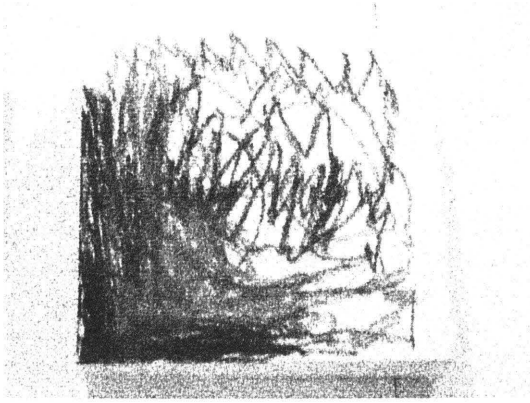
（水の味を表現してみる）

３種類の音を聞き分けた後、次のテーマはかなり難しかったのです。これは大人でもなかなか難しい作業だと思うのですが、「水の味」を表現してみるということをしました。無味無臭に近い水を自分の口の中に入れて味わった印象を、先ほどのように絵として表現してもらうということです。

実際に水を口に含んだまま描きすすめました。最初は冷たく感じたものが、ずっと口の中に入れているとだんだん温かくなっていく。その温かくなっていく印象をまた色に置き

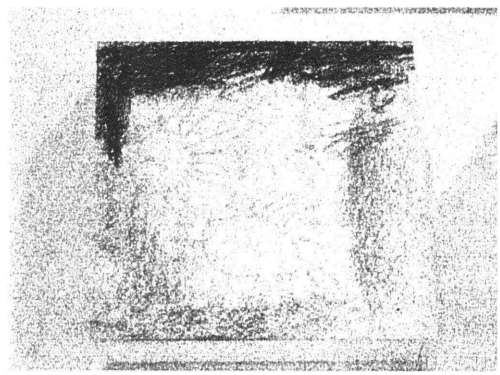
Hosei University Repository

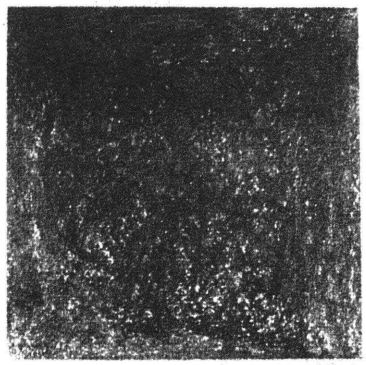
かえてとか、じゅわっと感じられてくるところをオイルパステルを寝かしたり、線でかいたりという感じで、子供たちが一生懸命表現してくれました。そして、先ほどと同じように、子供たちが取り組んだものを壁に張って、それぞれに鑑賞して回りました。この時は、３歳から５歳まで合同の授業でしたので、小さい３歳の子たちは５歳、４歳の大きいお兄ちゃん、お姉ちゃんたちの描いた絵をみて、自分とどのように違うのか。そういったことも子供なりに比較してみていました。



これは、水の味を表現した３歳児の絵です。そのときの印象を色と描き方で置きかえていかなければいけないので、線とか、点とか、塗りつぶすこと、そういった単純な行為で表現しております。

右の絵は太陽を描いたわけではありません。口の中でじゅわじゅわ広がっていく印象をかいているのです。子どもは難しい水の味を確かに味わい分けて描いたと思っております。



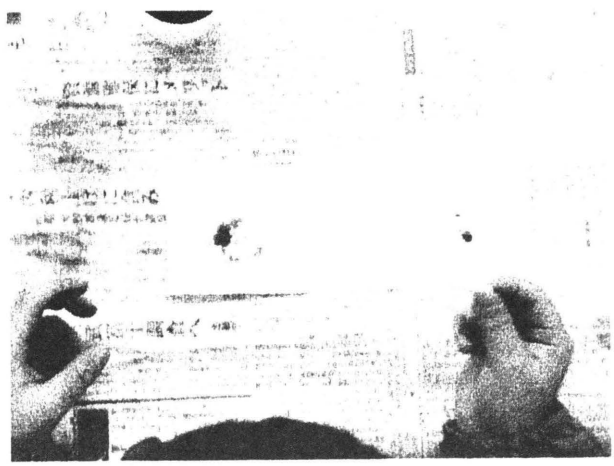


左の絵を描いた子は、いろいろな色がどんどんまざってきたわけです。口の中に含んでいるために最初の印象が徐々に変わっていく。そのことを色に置きかえて、どんどん塗りつぶされていったという表現です。

Hosei University Repository

（水のフォルメン）

第2回目の授業は「水のフォルメン」をやりました。フォルメンというのは形をなぞっていくという技法用語なのですが、水のフォルメンに入る前に水の質、特性に触れるということで、水のにじみを体感しました。水の中にいろいろなものがまざっていくという特性に触れて、そこから表現につなげていきました。



まず画用紙をぬらしまして、そこに絵の具や墨などをのせていくわけです。水を浸した部分と、浸していない部分の違いをみてもらいました。左の画面の画用紙の右側はぬれてない部分で左側がぬれている部分です。絵の具がどのように反応するか、その違いを自分で実際にやってみて水がどのくらい効果をもたらすのかということを体験してもらう。これは実際の作品ですが、大きな画用紙の画面全体が水でぬれていて、そこに絵の具を落として広がりを感じてもらいました。絵の具が水の中に広がっていった、その水がつくり出した形をオイルパステルでなぞっていく。水がつくった形を自分が追っていくということです。それが水のフォルメンという授業でした。この作品も何点か展示しておりますので、ごらんください。

（ウォーターダンス）

3回目の授業は、「ウオーターダンス」というタイトルで行ないました。これは「水の版画」というカリキュラムなのですが、水の1つの特性として表面張力というのがありまして、表面張力で水が丸く盛り上がっている形、水がどこまでいったらこぼれ出すのかということを実際に体験してもらいました。ちょっとしたゲーム形式でやったのですが、まだ水が入るのか、まだ表面張力はもつのかという形で、こぼれる瞬間を子供たちにスリルを持って味わってもらったのです。その後に、画用紙の上に同じように水玉をつくってもらって、そこに少し色をのせて紙を傾けます。自分のちょっとした行動で水が変化する。水が形を変えてしまうということを、水と自分の共同作業という形で表現してもらったものであります。水が動いたときの勢いとか、どきどき感なんていうものを色に置きかえて最終的な表現につなげてもらいました。その後、最後は水と自分のつくった形をなぞって切り取り、構成します。これもロビーに飾っていますので、ごらんになってください。

Hosei University Repository

授業の3回目までは表現ということを追っていきました。4回目にあたる最終授業は「水の気持ち」をテーマにしました。4回の授業ですからまとめなければいけませんので、水の気持ちをどうやって伝えるか。子供たちの小さな手から手に水をバトンリレーするような形で手渡していきました。水を渡せたか、渡せなかったのか、もらえたのか、もらえなかったか、もらえなかったときの悔しかった気持ちとか、渡せなかった悔しい気持ちとか、もらえたときのうれしかった気持ちなど、水と自分の気持ちの一体化なるものは何かということで、思い切って表現ではなくて遊びの感覚を取り入れた形でやってもらいました。

（授業を終えたあとで）

このように4回の授業を行いまして感じましたのは、環境というものが身近でもあるのですが、考えていけば考えていくほど遠くになっていく。どんどん広がりをもっていくものでもあるのだなということに気づきました。

今後のことを考えますと、私どもは表現活動が専門でありまして、先ほど藤川先生からもありましたけれども、子どもたちの回りにある生活環境というのはかなり都市化しております。都市化していく生活環境の中で、どうやって今回取り入れたような表現をするような形で私どもがかかわっていけるのかと考えましたときに、表現するときのエッセンスになるもの。人間という存在は自然がないと育たないのではないかということを思います。何が育たないかというと心の問題だと思うのです。人間の情緒感なるもの、そういったことが子どもが育っていくために重要になってくると考えまして、どのような自然のエッセンスをどのように取り入れられるのかということが、都会の生活の中でも1つの教訓として必要とされるものではないかと思っております。

今回、水をテーマに取り上げましたが、素材というものがいろいろ身近に存在しておりますので、そこをどういう切り口で組み立てていくのかということを今後の課題として考えていきたいと思っております。

ちょっと足早になりましたが、ご説明させていただきました。法政大学の学生のみなさん、昌平幼稚園の竹山先生と担任の先生のみなさん本当にありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

Hosei University Repository

第5節　パネルディスカッション「CSRとしての企業が行なう環境教育支援」

それでは、第4部のパネルディスカッションを始めさせていただきます。

初めに、本日のパネリストを紹介させていただきます。千代田区立昌平幼稚園副園長、竹山朋江様（拍手）。キリンビール株式会社CSR・コミュニケーション本部社会環境室長、山村宜之様（拍手）。NPO法人企業教育研究会副理事長、塩田真吾様（拍手）。東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課、梶野光信様（拍手）。本日のパネルディスカッションのコーディネーターを務めます法政大学大学院政策科学研究科教授、田中充です。

それでは、田中先生、よろしくお願いいたします。

○コーディネイター―　それでは、パネル討論を始めたいと思います。

できれば、5時ちょっと回るかもしれませんけれども、1時間ぐらいの中で、テーマであります「企業が行う環境教育の実践と課題」について掘り下げていきたいと思います。

パネリストの皆さんは私どもの企画でどんな方をお呼びしたらいいかなということを考えて、4名の方を選ばせていただいたのですが、パネル討論の趣旨とあわせて、ここでどんなことを考えているのかをご紹介させていただきたいと思います。

パネル討論では、4人のパネリストの方はそれぞれお立場が異なっております。竹山さんは教育の現場に実際携わっていらっしゃいまして、先ほどの事例報告であります幼稚園の教育をあずかっていらっしゃいます。山村さんはキリンビールという会社の方で、具体的にCSR活動をなさっている。とりわけ以前の職場であります兵庫県の西宮市でも、企業が具体的に地域の環境教育に参画した。そういう実績をおもちでございますので、そのあたりのことも含めてご紹介をしていただく。塩田さんは先ほどの藤川先生のご講演にもございましたけれども、企業教育研究会という立場で、つまり、第三者機関、コーディネーターとして企業と学校を結びつける。そういう役割に携わっていらっしゃいますので、そうしたご経験をお話ししていただこうとお願いしております。梶野さんは東京都の教育庁ということになりますが、教育行政のお立場で、つまり、こういう活動を行政としてどのようにとらえて、あるいはこれからどのようなスタンスで臨まれているのか。そんなことをお話ししていただこうということで、4人の方に登壇いただいたわけでございます。

私から、ただ今4人のパネリストのざっとした基本的なお立場をご紹介させていただきましたが、次に討論の進め方をご紹介いたします。最初に4人のパネリストから基本的な活動の内容あるいは実績、そして課題といったことのご認識を、ご準備いただきましたレジュメ等をもとに第1ラウンド、発言をお願いしたいと思います。時間に余裕があれば補足の発言を第2ラウンドで簡単にお願いしたいと思いますが、時間がなければ、もう早速、フロアとの討論をお願いしたいと思います。ぜひフロアの方から質問用紙に質問内容等をお書きいただきまして、お寄せいただければと思います。そこで私から質問用紙をみながら、この点についての課題はどうお考えですかということで、パネリストへ投げかけをさせていただく。こんなことを考えております。大体15分か20分ぐらいパネル討論行い、その後でまとめということで、約1時間でパネル討論を進めていきたいと思います。

そこで最初に、パネル討論に当たっての基本的な考え方を私からごくかいつまんでご紹

Hosei University Repository

介させていただきます。テーマは「企業が行う環境教育の実践と課題」ということでございまして、私はここで考えなければいけない3つのことがあると思います。

1つは、環境教育の今ということでございます。つまり、環境教育は今どういう状況にあるのか、なぜ現代社会で環境教育が求められているのか。そこの背景をもう一度、整理した方がいいかなと思います。つまり、持続可能な社会ということが環境政策の重要な、あるいは環境政策のみならず世界全体の重要な課題となっておりまして、持続可能な社会をいかにつくるか。そのために、さまざまな努力が行われております。私はその中の1つは持続可能な社会をつくり得る、いわば人材育成、人づくりだろうと思うのです。もちろん科学技術の進展でありますとか、あるいは制度、政策をどうつくるかということもございますが、そうした制度、政策や科学技術を担っていく人をいかにつくっていくのか。ここが環境教育のある意味で原点として求められているスタンスではないだろうかなと思います。

ところが、教育現場の現状をみてみますと、例えば多様に広がっていく環境問題。そして、それに対する膨大な知識。あるいは多様化している現代のさまざまな活動に対する専門性。こうしたことに、教育の現場ではなかなかそこがフォローアップできていけていない。追いついていけていない。多分そういう状況なのだろうと思うのです。そこで、外部の専門家を、ある意味で登用していくといいますか、活用していく。そういうことが今、教育の中に求められているのかなと考えております。例えば持続可能な社会という本当に現代的な新しいテーマに対して、どういうスタンスで環境教育の豊富化を目指していくのか。そこが今課題になってきている。これが教育側の大きな課題、状況ではないかなと思う次第であります。

ところが、もう1つの、本日の切り口であります企業ということを考えてみますと、この間、企業の社会に対する影響力が非常に増してきました。つまり、現代社会に与えるさまざまな影響が広がってきております。その裏返しとして、企業の社会的責任ということが問われてきております。これはもちろん環境のみならず、人権であったり、福祉であったり、労働問題であったり、さまざまなところで企業の社会的責任が問われてきている。その1つに環境問題への貢献もあるだろうと思います。

持続可能な社会ということでよくいわれるのは環境と、経済と地域社会、あるいはコミュニティーの統合という3つの要素を、いかに重ね合わせて統合化していくか。これは持続可能な社会のキーワードとよくいわれます。つまり、もし企業が経済活動を担う主体だとすれば、同時に環境面にも、社会面にも貢献していく存在であらねばならない。これが持続可能な社会における企業のあり方だろうと思うのです。そうしますと、環境教育というテーマは、まさに経済主体である企業が環境問題という環境側面、そして教育という社会的側面に、いわば両方に貢献し得る。企業にとってみても、社会から要請され得る、期待されている分野の1つだろうと思うのです。それは企業がもっている多様で非常に奥深いポテンシャル。例えば、人材であったり、技術であったり、製造や事業活動の現場であったり、環境対策の事例である。そういう現場なり、事例なり、そして技術をもっている。そういうポテンシャルを生かして、いかに人づくりに結びつけていくか。これも企業の社会的貢献活動の1つになり得るだろうと思うわけです。

そこで千代田学というテーマで、私たちは企業と環境教育を結びつけるということをテ

Hosei University Repository

ーマに、18年度、取り組んでまいりました。とはいえ、しかし、なかなかそこは一気には結びつかない。そこにはかぎが必要である。どうもそのかぎが第三者機関、あるいはコーディネーターといってもいいかもしれません。つまり、企業と学校、教育を結びつける役割が必要だということになります。

そこで、このパネル討論では、まず学校の場において、どういう現状なのか。学校における環境教育は一体どうなっているのか。これをご紹介していただくことが1つあります。もう1つは、それに対して企業はどのように参画し得るのか。企業の側の実態はどうだろうか。その現状と課題は何があるか。これをもう一度、それぞれのパネル討論の中でパネリストの皆さんからご発表していただきたいと思います。それから、あわせて第三者機関としての役割。そこをつなぐとしたら、どういうことが課題になっているのか。それはどのような意味をもっているのか。そういうことについても論議を深めていって、これがパネル討論の位置づけと考えたいと思います。少し長くなって本当に申しわけございませんでした。

それでは、竹山さんから順番に、どうぞご発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○竹山　　昌平幼稚園の竹山朋江と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

企業の方がほとんどということですので、まず幼稚園って何となく皆さんどんなところなのだろうと。小学校、中学校と違いますので、おわかりにならない方もいらっしゃるかと思います。

幼稚園は遊びを主体として、遊びを通して子供たちにさまざまな学びを促し、人として生きていくために必要なさまざまな力を身につけていくところです。幼稚園教育指導要領に沿って実践を積み重ねております。千代田区は4年前、ISO14001を取得しまして、それに伴いまして学校現場にも、それがおりてまいりました。当初、非常に戸惑ったのですけれども、よくよく考えてみますと幼稚園教育はまさに人づくりの第1段階、重要な時期であります。ですから、環境教育はまさに幼稚園から始めていかなければならないのだということを、ISOの取得に伴って私たちは再認識いたしました。

環境教育の大きな目標であります環境を構成する1人の人間として、環境の向上に積極的に貢献できる人間の育成という視点に立って、幼稚園ではどんなことができるのだろうということで、昌平幼稚園では自然体験を重視した活動を取り入れております。大まかなものは、実はレジュメではなかったのです。こんな内容のことをお話ししようと思いますということで法政の方に提出しましたら、レジュメになって出てしまったので内容が若干変わってきてしまうと思いますが、よろしくお願いいたします。

こういう大きな方針に沿って進んできています。特には、稲作体験を取り入れております。稲作を始めて3年目。昌平幼稚園は3年保育なので、3歳で入園してきた子供が初めて体験して、ことしで3年目。実はきょう修了式で巣立っていきました。

年長の子供たちが稲作3年目を迎えたときに、私にこういう話をしてくれました。稲のことをイネちゃんと呼んでいるのです。「先生、イネちゃんが大きくなって、すごくうれしい。イネちゃんって生きてるんだなあって感じたんだ。だから、稲刈りのときにかわいそうだなって。生きてるイネちゃんを刈るのがかわいそうだなと思って、僕は稲刈りをした

Hosei University Repository

んだよ」、そんな子供たちでしたので一粒一粒のお米を非常に大切に扱い、大事にしました。まさに命を感じ、大切に思う。命をはぐくむということでは、大きな成果を上げることができたのではないかと思っています。

また、田んぼにはさまざまな生き物が集まってきます。タニシはイネちゃんにとってはいいけれども、イネツトムシという稲にとっての害虫もいます。でも、その虫にとっては稲を食べなければ生きていけない。自分たちは稲を育てたいから、害虫のイネツトムシを殺さなければならない。小さいながらも葛藤しながら稲を育ててきたわけなのですが、身近な自然の中、自分たちの回りにたくさんの生き物がすんでいるということも、子供たちは実体験を通して学ぶことができました。

昌平幼稚園の主な環境教育は自然との触れ合いなのですが、その自然との触れ合いを豊かにしていくためには、やはり豊かな感性を培っていくことが重要ではないかということで、今回、造形芸術研究所の方のお力をかりて「水と私」という取り組み、プロジェクトをさせていただきました。実際のところ、なかなか話し合う時間がもてなかったり、3歳から5歳の小さな子供たちですので授業形式では非常に難しい場面もありました。しかし、体験を通して生活の中の水や自然物にとっての水と自分たちの水というものを、何げなく感じていたものを子供たちが非常に意識して生活するようになったと思います。また、表現方法にはさまざまな方法があるのだということを子供たちが実感し、絵をかくことが苦手だった子も伸び伸びと自分なりの表現活動を楽しむようになったという点で、非常に効果が上がったのではないかと思っております。

ビオトープづくり、それから今回の感性画。感性を磨く活動を通してでも共通にいえることなのですが、私たちが環境教育を実りあるものにしていくためには何が一番足りないかというと、専門的な知識や技能という点です。小さな幼稚園という集団の中では限られた知識の集まりですので、どうしても限界が出てしまいます。今回、造形芸術研究所の皆さん方に、中心になって指導していただいたことで、教員自身がいろいろな表現方法を学ぶことができました。また、環境問題の意識もさらに高まり、どのように子供たち、それから保護者に啓発していけばいいのかということを学ぶことができたと思います。

なかなか幼稚園という枠の中で企業と連携していくというのは非常に難しいのですが、ぜひ専門的な知識、それから技能、そういったものをこれからも提供していただけると、幼稚園の環境教育も充実していくのではないかなと思っております。時間も押しているようですので、また何かございましたらよろしくお願いします（拍手）。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

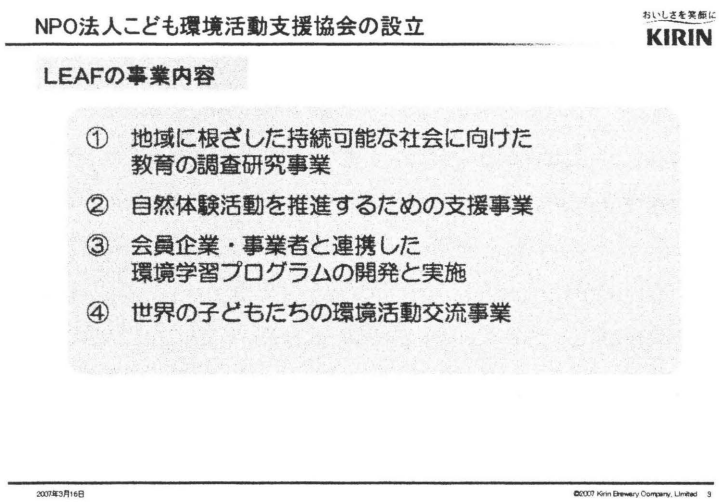
竹山さんからは昌平幼稚園の取り組みということで、子供たちが園の中でどういう環境教育をされ、また今回の水の教育でどのように変わったかということをお話しいただきました。ありがとうございました。

それでは、山村さん、お願いしたいと思います。どうぞ。

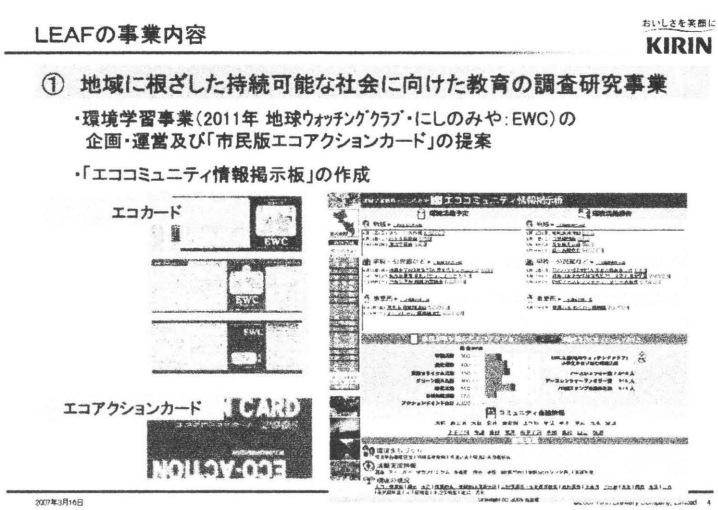
○山村　　キリンビールの山村と申します。私はパワーポイントを用意してきておりますのでお願いいたします。私は企業の立場でお話をすると同時に、NPOの立場でお話をさせていただこうと思っています。きょうお話しするのは、企業とNPOとの環境コミュニ

Hosei University Repository

ケーションの連携事例ということなのですけれども、まず最初にお話ししたいのは NPO ができてきて、どういう機能をもってきているかというお話です。第1部で西宮市の NPO 法人こども環境活動支援協会のご紹介をしていただきましたけれども、私たちが連携しているこども環境活動支援協会。長いので以降は LEAF といわせていただきますが、まずはそちらの設立にかかわるお話と、今どんなことをやっているのかというお話をさせていただきます。



この LEAF は、これまで行政が、西宮市役所が地球ウオッチングクラブという名前の子供向けの環境学習活動を続けていました。それは地域の中で環境に配慮した人をどれだけふやしていけるか。環境に配慮した行動がとれる人をふやしていけるかということを目的にしたときに、子供をターゲットに置いてやり始めた事業です。これは今、環境省がこどもエコクラブという名前で全国に展開しているもののモデルです。今でも LEAF からノウハウを渡して、全国に広めていってもらっているという構造になります。その西宮市のこども環境活動支援協会が生まれる前の西宮市の事業でやっていたところが、ご存じと思いますが 95 年に阪神大震災がありまして、結局、人、物、金が全部復興予算の方に回ってしまいます。事業を継続するためには行政から離して、独自財源によって人材を確保していかないと事業が継続できないということになりまして、この事業の運営母体を行政と一緒に民営化していった。

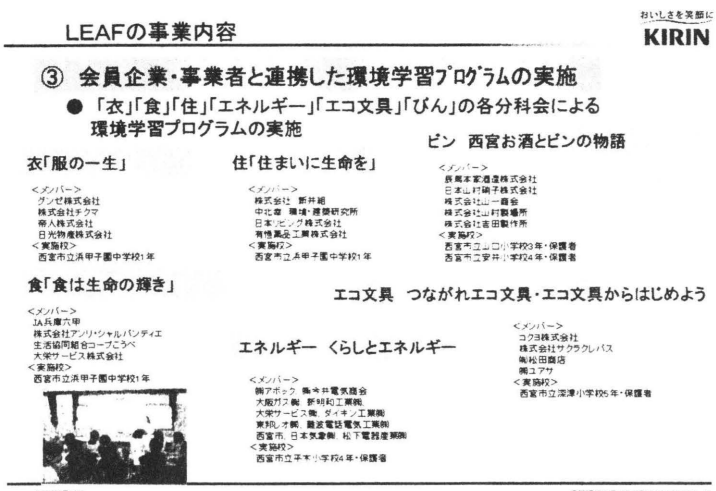


私自身が当時は同じ西宮市のところに住んで、西宮市民だったのですけれども、企業のボランティア休業制度という制度で、2 年間、企業を休んで西宮市役所に通って、プログラム作成から 100 人を超えるボランティアのコーディネートをやって、民営化するためのお金集めをして、この組織ができ上がったときに戻ってきて、今、いつの間にかこういう仕事をしているという立場です。つくり上げる過程でもさまざまな主体がかかわってつくっていったところですので、理事構成も企業ですとか、教育機関ですとか、いろいろなところが入って理事を構成しています。

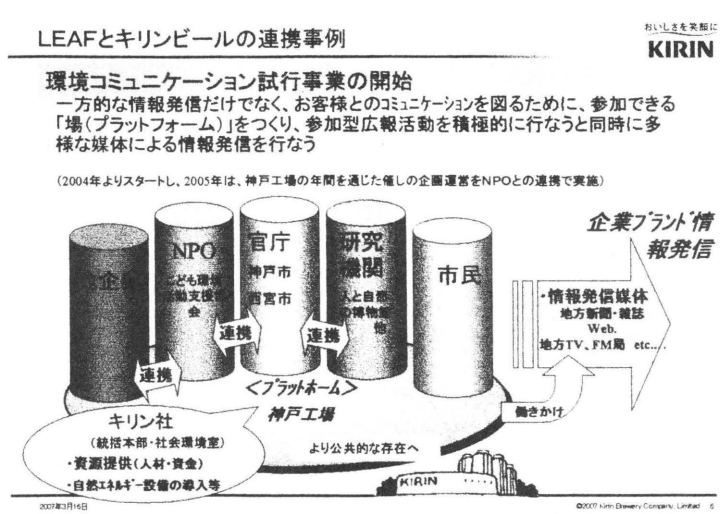
4つの事業の大きな柱があるのですが、きょうはそのうちの2つを主にお話しします。1

Hosei University Repository

つ目が、私も正式な名称はペーパーをみないといえないのですが、地域に根差した持続可能な社会に向けた教育の調査研究事業ということで、これは多分、小さくてみにくいと思うのですけれども、左上の方にエコカードというのが映っていると思います。このエコカードというのは西宮市の子供たち、公立の小学校 24,000 人と、プラス一部の私立の小学生の全員に行っています。学校の先生が環境の授業をすると、学校の先生がスタンプを押してくれます。例えば学校のそばにある文具屋さんでエコマークの商品を買うと、その文具屋さんの方がまたスタンプを押してくれます。近くにある量販店に買ったトレイや牛乳パックを洗ってもっていくと、サービスカウンターで量販店の方からスタンプをもらえます。市役所のいろいろな見学機関ですとか企業の見学に行っても、環境見学をするとスタンプがもらえますし、子供会ですとか、ボーイスカウト、ガールスカウトとか、いろいろな団体の中でも環境活動をすると同じスタンプがもらえます。ということで、これは子供たちがいろいろなときに、自分たちのやりたいときに環境の取り組みをすると、周囲の大人が共通のスタンプを押すということで、評価できる大人のネットワークを築いているというのが西宮市の特徴です。



こういうことをやってきたということと、もう1つの大きな特徴は企業との連携でいろいろな事業をやっているということです。西宮市の地球ウオッチングクラブが始まったのが 1992 年で、実はその当時ぐらいから始めているのですが、ここしばらくの形態はどういうことになっているかというと、例えばここにありますように衣、食、住、エネルギー、ビンというようなテーマごとに複数の企業。これでいうと三十数社あるのですけれども集まって、自分たちの事業活動だったら、どのように子供たちに伝えられるかというミーティングを繰り返して、実際に学校に出前授業をするというようなことをしています。企業にとってみれば、ある企業は、これは社員教育で最も有効的な、子供たちに教えるということで自分たちが学ぶということを、非常に評価しているというようなところであります。



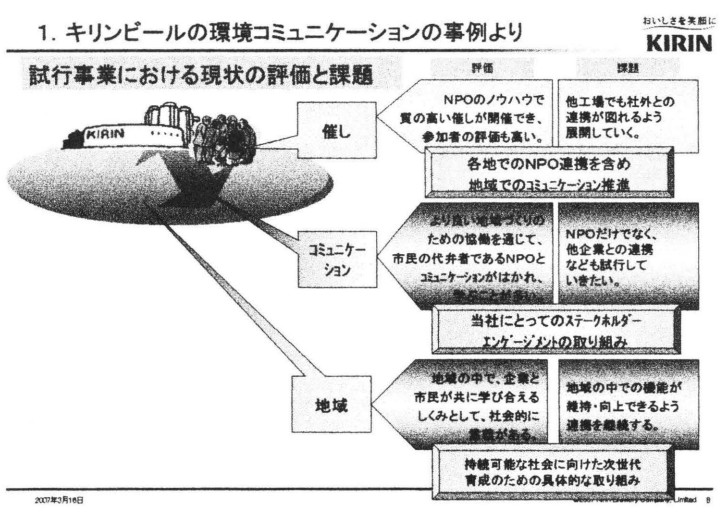
では、私たちキリンビールはということでいいますと、今のようなかかわり方とちょっと違うかかわり方をしたいということで、環境コミュニケーション。つまり、我々の仕

Hosei University Repository

事でいうと環境コミュニケーションを、特にお客様と直に接する場面でNPOと連携してやっていきたいと考えました。それを、このNPOのそばにある神戸工場という場において、いろいろな主体と一緒に環境コミュニケーションでよくあるのが、自分たちはこういうエコ商品を開発しましたというコマーシャルが多々流れていると思うのですが、我々食品企業はそういうエコ商品が成り立ちにくいこともあって、地域のことをみんなでよく知って、地域をよくしていこうというコミュニケーションをとるようにしています。そのときに我々だけでするのではなくて、いろいろな主体と連携をしてやるということで進めていく上で、さまざまな主体のつなぎ役になっているのがＬＥＡＦというＮＰＯであるということです。

ＮＰＯとの連携ということで考えますと、最近の企業のCSRということでよくいわれるステークホルダーとのコミュニケーション。地域をよく知って、いい地域づくりをしていこうという目的を共有化する企業とNPOがその事業に一緒に取り組むことによって、さまざまな主体のつなぎ役になっているのがＬＥＡＦというＮＰＯであるということです。

これは2005年、2006年とやってきたものがどうかということでいいますと、アニメーションにしてしまったので、もう時間がないので全部動かしてからやりますけれども、これまでいろいろな催しをやろうとしてやったものが、自前で全部やらなければならなかったことから、特にNPOに絡んでもらったことで参加者の満足度が非常に高いということが１つと、我々企業がすべてやらなくても済むようになりましたので、効率化して楽になれたということがあります。例えば楽になれた事例でいうと、特に大きな問題はいろいろな催しをしたときにどうやって人を呼ぶかということです。参加者をちゃんとある程度の人数を確保したいと思うのですけれども、なかなか確保できない。NPOが入ったことで何をしたかというと、近隣の自治体のところにある子供会に話をして、この企業で、こういう催しを、この人で、このようにやる。早い者順とかで、つまり、今は子供会単位で１年間の催し。例えばビオトープ見学会は、ここここの子供会が来ると決まっているのです。ということで自分たちで人集めをしなくても、こういうことで、その場をうまく使いたいという団体とつないでくれているというのがあります。



NPOとの連携ということで考えますと、最近の企業のCSRということでよくいわれるステークホルダーとのコミュニケーション。地域をよく知って、いい地域づくりをしていこうという目的を共有化する企業とNPOがその事業に一緒に取り組むことによって、さ

Hosei University Repository

まざまなことを企業でも学ぶことができるということです。

私の発表は、冒頭、環境教育とは申し上げずに環境コミュニケーションと申し上げましたが、実はコミュニケーションの場がきちんと成り立つと、それが学びにつながるということであるのではないかなと思っています。

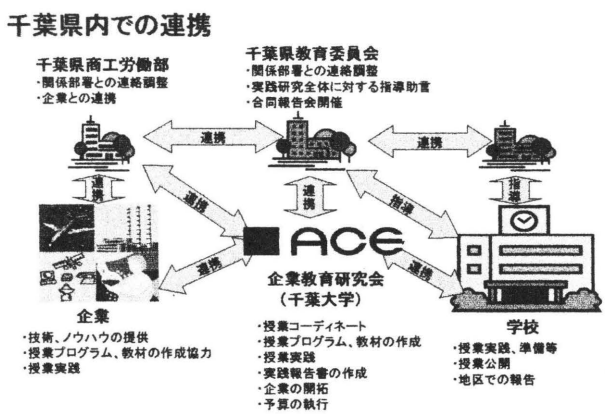
というようなことなどで、後ろ向きにしてしまいました。本当はもうちょっと用意したものがあるのですが、時間が来ましたので一たん、この辺で終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

○コーディネーター　　どうもありがとうございました。

キリンビールのLEAFという西宮市のNPO法人との連携についてご説明がありました。（パワーポイント）それでは、次に塩田さんよろしくお願いいたします。

○塩田　　大方のことは理事長の藤川がお話しさせていただきましたので、少しさくさくと進めさせていただきたいなと思っています。

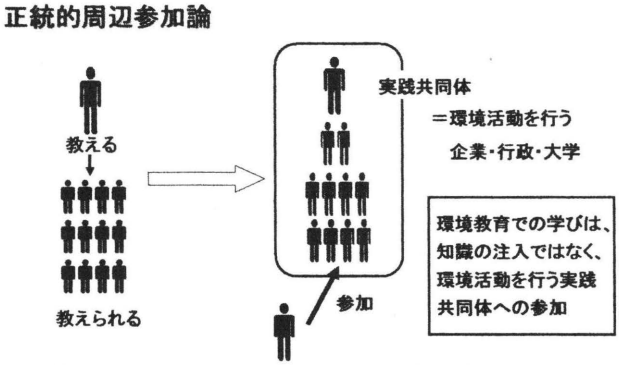
■ NPO法人企業教育研究会とは



まず、先ほどもありましたけれども、我々の企業教育研究会の全体像なのですけれども、基本的にここに企業がありまして、企業と学校を結ぶために学生――これは千葉大学教育学部の学生なのですが、教育学部の学生が中心となって企業と学校を結んでいく。そして、授業づくりを行っていくというのが基本的な活動内容です。設立が2003年。おかげさまでスタッフも常勤5名、非常勤15名という形で少しずつ大きくなってきました。

千葉県内での連携の様子なのですけれども、真ん中に企業教育研究会、千葉大学とあります。ここと上にあります千葉県教育委員会が連携をしまして、ちょっとこっち側が消えているのですけれども、ここに市町村の教育委員会というのですか。市町村レベルの教育委員会が連携し、さらに商工労働部の方と連携させていただいて、企業側の窓口は商工労働部、そして学校側の窓口が県の教育委員会と各市町村の教育委員会。それと、大学と企業教育研究会が一緒になって授業をしていくというような全体像です。

■ 環境教育の考え方



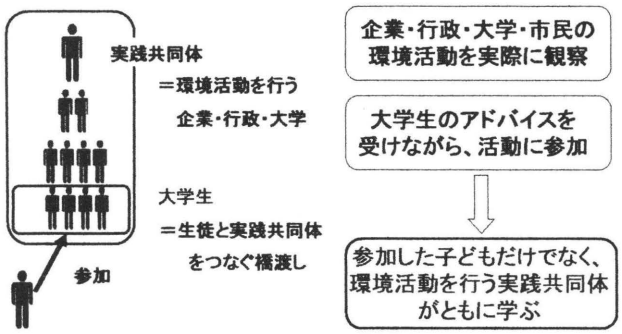
その前に、これも先ほど藤川から話がありましたけれども、企業教育研究会の環境教育

Hosei University Repository

の考え方ということで正統的周辺参加論。従来の学校教育ですと――黒いのが子供たちなのですけれども、担任ですとか、専門家から知識の注入を行ったわけなのですが、そうではなくて環境教育では、学びというものは企業とか、学校とか、大学とか、教わるための実践共同体に参加していくこと。環境教育でも、学習というのは知識の注入ではなくて、参加が重要なのだというような考え方をもっています。

■ 環境教育の考え方

正統的周辺参加論にもとづく環境教育



特に千代田区の九段中等教育学校の例でいうと、ここに大学生というのですか。実践共同体と子供たちをつなぐ役割、先輩として役割を担ってくれた大学生というのは、非常に有効な役割を担ってくれた。こういった活動をみながら参加した子供たちだけでなくて企業ですとか、学生でも環境を学ぶ機会になったのではないかなと思っています。

さらに、先ほどもありましたけれども、キャリア教育としての環境教育ということで、子供たちが実践共同体というものに参加をすることで、企業の活動をみることで子供たちが今の生活だけではなくて、大人になってからの環境に考慮した生き方というものについてもみることができる。こういったところも1つ重要な、環境教育としての考え方かなと思っています。

■ これまでの実践事例

京都市内小学校6年　総合的な学習の時間

（協力：京セラ株式会社）

	カリキュラム内容
1校時	消費電力量を体感しよう　～自転車発電機を使って～
2校時 3校時	エネルギー問題と解決に向けた取り組み・課題につい知ろう ～太陽光発電を中心として～
4校時 5校時	太陽光電池の新しい活用アイデアを考えよう
6校時	新しい活用アイデアを発表しよう～京セラ担当者に提案しよう～

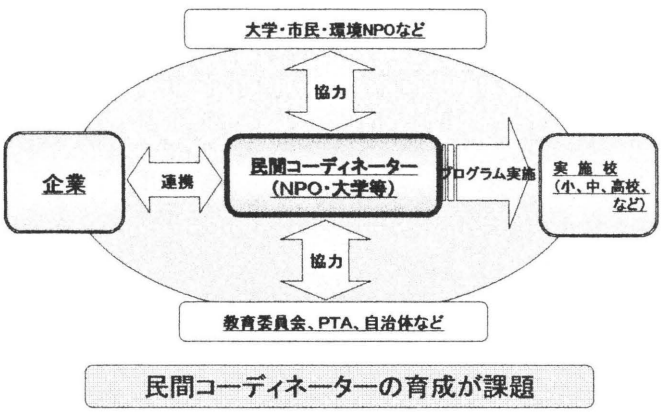
実際に具体的な事例なのですけれども、まず先ほどありました九段中等教育学校での授業ですとか、これは一昨年になりますが、京都の京セラさんと太陽光電池について学ぼうということで、総合的な学習の時間を使って授業をさせていただきました。新しい太陽電池の活用アイデアなんかを子供たちに発表させて、それに対して企業の方がコメントを行うというような授業を行いました。さらに教材なども我々の方でつくっておりまして、関西電力さんと「みんなの家に電気が届くまで」。これは実際に我々スタッフが取材に行きまして、山の中の発電所から変電所を通って、みんなの家に電気がどうやって届いているのだろうというのをビデオ教材としてつくって、学校で授業を行ったりしました。

こういった実践を通して、我々、取り組みの課題というものがみえてきたのですけれども、ここに図を示したのですが、基本的に企業と学校が直接連携するのは難しい。そこで我々のような真ん中にある民間コーディネーター、第三者機関が重要になってくるのですけれども、その中でなかなか育っていかないという2つの理由があるかなと私は考えているのです。

Hosei University Repository

1つは、民間コーディネーターの中には、教育について考えている人、教育についてよく知っている人が必要ではないか。学校って3月、4月ぐらいになると年間スケジュールというのを立ててしまって、途中から企業の方が授業をやりたいのですけどといっても、なかなか受け入れてもらえないとか、学校特有の文化というものがありますので、そういったものに精通している人が民間コーディネーターの中にいる必要がある。さっきのLEAFさんの話ですと、学校関係者というのが中にいろいろおりましたので、そういった方がうまく機能していたのかなと思っています。

■ 取り組みの課題



あと1点は、資金面が第三者あるいはコーディネーターにとっては大きいのかなと思っています。我々は企業から教育貢献、社会貢献費としてお金をいただいたりですとか、国や県、行政からお金をいただいたりしているのですけれども、そういったものの資金的な面がかなり大きいのかなと。こういったものになると、第三者機関としてうまく活動することができない。今後、教育的な面をどうするかというところと、資金的な面をどうするかというのを制度的なものも含めて考えていかないと、こういった取り組みというのが長く続かないのかなと考えています。その解決策については、このディスカッションの中で少し深めていければなと考えております。

以上です（拍手）。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

塩田さんから、コーディネーターとしての役割ですね。その重要性と、それから課題についてご紹介いただきました。それでは梶野さんお願いします。

○梶野　　私に与えられた課題に沿えば、行政による第三者機関のモデルをどう提示するかということと、環境教育をはじめとした行政による教育支援の役割とは何かというようなことについて、話をしたいと思っております。東京都教育委員会では、企業・大学・NPOが協働して学校内外を通じた教育活動を支援する目的で、平成17年8月に地域教育推進ネットワーク東京都協議会を設置しました。

東京都地域教育推進ネットワーク協議会の話をする前に、教育行政施策として、どのような施策モデルが求められているかということをまずはじめに説明したいと思います。

本日配布させていただいたレジュメにはポスト工業社会における学びの転換というように書いてあります。工業化社会の学びというのは、囲い込み型というように書いてありますけれども、枠組みをはめ込んで、その中で社会に適用できる人材の育成をしていればよかった。工業化社会を進展させる教育システムづくりにおいて、日本は特にすぐれていたというようにいわれております。しかし、成熟社会の状況を迎えていく中で、教育スタイ

Hosei University Repository

ルを変換していくことが大きな課題となっています。それをどう進めるかということが現代日本の教育の大きな課題だと考えています。学校組織の変革ばかりに関心を寄せていると、そのポスト工業化社会の学びに向けた改革というのが進まないのではないかというのが我々のセクションの物の見方です。

では、新たな知識創造のプロジェクトとでもいうのでしょうか。そういったものを子供たちの学びにどういう形で取り入れていくかと考えると、レジュメの2枚目に書いてありますように、多様な主体が子供たちの教育活動に参加、参画できる仕組みづくりを進めていく必要があるだろう。この多様な主体というのは地域住民でありますし、企業や大学、NPO といった専門的な知識をもった方々たちが、いかに子供たちの教育活動にかかわっていただけるような仕組みをつくるか。それを通じて子供たちの主体的な学びといいますか、学ぶ意欲をどう引き出せるかを考えていった施策モデルを、我々としては考えていかなければいけないだろうと思っております。

そこで考えたのが、学校を中心として、地域住民や企業・大学・NPO 等周辺領域にあるような方たちがもつ教育力を、いかに学校教育に取り込むかというような施策のモデルを考えていく必要があるだろうということです。ただし、なかなか行政というのは、皆さんからもよく批判を受けるように縦割りがかなりきつい組織です。部局横断的な施策の予算化というのはしづらい状況なので、そういった施策が地域レベルにおいて有効に機能する仕組みをつくろうと考えて予算化したのが、2 番目に紹介する地域教育プラットフォーム構想というものになります。

2 番目に移ります。地域教育プラットフォーム構想とは多様な社会資源の参加により、いろいろな知識が共有されて新しい活動を生み出していきながら、そういった第三者機関――私どもでは中間支援組織という言い方をしているのですが、家庭教育の支援、学校教育支援、学校外教育、地域における教育活動というものを新しい形で生み出していって、学校、家庭、地域の連携、協働を生み出す仕組みをつくっていこうと考えています。

それとともに、これは地域レベルの取り組みで、それができるような仕組みをつくっていこうというのが区市町村レベルの地域教育プラットフォームの考え方です。これは地域住民が主体となって行うものです。それに加えて、企業・大学・NPO 等とのネットワークを広げる東京都レベルのプラットフォームをつくることによって、地域のそういう活動がさらに活性化していくような後押しをしていこうというのが、東京都で考えている地域教育プラットフォーム構想の全体です。その核になるものが、多様な社会資源と学校をつなぎ、新しい教育活動を生み出していく教育支援コーディネーターという存在だと考えています。教育支援コーディネーターは教育インキュベート機能を発揮して新しい教育活動を生み出していくことを、進めていこうとしています。

つぎに地域教育推進ネットワーク東京都協議会について説明します。そういった地域のコーディネーターの方たちと連携しながら、もっと企業や大学、NPO のもっている専門的な知識というか、知恵を子供たちの教育に活用できるような仕組みをつくりたいという思いで設置しました。現在 120 を超える団体の参画を得て、こういった組織をつくっています。それぞれに課題の部会などを設置して幾つかのプロジェクトを展開しているのですが、きょうの話の関連でいえば、学校教育支援部会、教育コーディネート部会が大きな役割を果たしているということになります。

Hosei University Repository

ここで目指しているものは、東京ならではの取り組みをしていくということです。東京の地域特性を生かすというようにレジュメに書いてありますが、企業、大学、ＮＰＯといった豊富な知的な社会資源が多くあること、コーディネーターの資質を備えた地域住民が多数存在していること、が東京という都市が持っている魅力です。いろいろな企業や地域での活動の経験をされてきた保護者の方たちが教育支援活動に参加することによって、さらに多様な教育活動の展開が期待できるということが東京のもつポテンシャルだと考えています。

それとともに、企業、NPO の主体性を最大限に尊重するというようにレジュメに書いてありますが、これはどういう意味かというと、企業が学校関係者の方に授業支援をしたいというようにいってくると、学校は「教育課程」という枠を理由に申し出を断るということがよくあります。自由な発想で授業をつくるということ自体が難しいのです。学校はカリキュラムは固定化していますし、年間行事も１年前から決まっていますから、コーディネーターを介在させることによってそういう障壁を切り崩して、なるべく主体的に企業のもっているポテンシャルみたいなものとか、知識というものを生かせるような仕組みをつくろうと考えています。地域教育推進ネットワーク東京都協議会は、都教委と民間団体でつくる組織です。その中での都教委の役割は教育活動の質をチェックするという役割があります。ある意味では質的な保証を学校に対して行うというのが教育機関の役割であると言えます。

きょうの資料の中に「みんなの生涯学習」№84、85 というものをお入れしています。その中にどのような活動がされているかということで、我々の活動の一端をご紹介させていただいております。ありがとうございました（拍手）。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

今、梶野さんから教育行政として、いわば教育の現場の外部の力が入っていくことの枠組みをどうつくるか。プラットフォームと称しておりますが、それをどうつくるか。こういうご紹介がありました。

さて、4 人のパネリストの方、私も含めてひとあたりご発言をいただきました。ご質問のある方は、スタッフが回っておりますので、どうぞお出しをください。その時間を利用して、私から一、二、投げかけをしたいと思います。

パネリストの皆さんの方で、これは言い足りなかったという点がありましたら少しご発言をいただきたいと思いますが、よろしいですか。大丈夫でしょうか

そうしましたら、一言ずつ、ご発言をお願いしたいと思いますが、竹山さん、幼稚園という、いわば子供たちみんなが小さい中で自然に触れる稲づくり、それからビオトープということ。今回はさらに水というテーマで環境教育をしていただきましたが、具体的にそういうプログラムを持ち込むことによっての課題はどのようなものがありますでしょうか。場合によっては、その意味というのはプラス面、課題というのはマイナス面、あるいは障害ということになりますが、その点について簡単で結構です。ご紹介いただけますでしょうか。

○竹山　　先ほどもお話をしましたが、ビオトープを通してさまざまな生き物と触れ合う。

Hosei University Repository

その中で、子供たちが直接さまざまな生き物と触れ合う中で、体験した中で学んだことというのでしょうか。命の大切さだけではなくて、それぞれかかわり合いながら生きている。共生のあり様について体験を通して学んでいるということは、やはり非常に意義深かったと思っております。

自然とのかかわりは季節を通して、タイミングよく私たち教員が受けとめながら、適切に活動の中に組み込んでいくことが非常に難しいということを感じております。

ただ、本来、家庭や地域でさまざまな体験を通して心の豊かさや物とのかかわり方などを学んできたものが無くなりつつあります。それを幼稚園の中で補っていかなければならなくなったという課題があります。新たなカリキュラム編成を今まで幼稚園教育で培ってきたものの中に、環境教育という視点も合わせながら効果的に組み込んでいくかということが、これからの大きな課題だと思っております。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

次に山村さんはキリンビールでCSRのご活動をされています。ご質問の中にもあるのですが、会社の中でそうした対外的なCSR活動の持ち出しを、恐らく会社の本務としてみると外部活動というように評価されがちで、そういう活動を外に広げていくことは制約があるのではないかということです。それについて社内的にどのように説得をされたのか。こういうご質問が来ておりますが、その点、いかがですか。

○山村　　多分今のご質問でいうと、例えば私がこの場に来ることというような場面と、もとから全国に11ビール工場がありまして、1年間に100万人ぐらいの方の見学を受け入れていますので、その一環として、夏休みは親子向けの環境教室を企画しているとか、もともとやっていることがありましたので、今申し上げたようなことが特別にプラスアルファが持ち出しになっているかというと、そうでもなくて、むしろこれまでやろうとしてきたことでなかなかうまくできなかったものが、うまくできるようになってきたというような観点で評価しているところです。

○コーディネーター　　つまり、もう少し質問を深めますと、例えば企業が環境教育に参画をする。つまり、学校教育などに参画をする。それはちょっと行き過ぎではないのという勢力が社内的にあるのではないか。そういうものについて、どのようにご説明されたのでしょうか。例えば、そのように問いかけていかがでしょうか。

○山村　　確かに、内部の意見でもそこまでしなくてもというようなお話がありますが、企業のCSRを考えたときに未来に対しての責任って、今現実にこの世界で、この時間に生きている人間にはあるのだろうと思うのです。環境の場面ではよくいわれるみたいに、よりよい環境を次の世代にどうやって引き継いでいくのかということは、企業であれ、個人であれ、それなりの責任があるのではないかと思いますから、そういうことをまずは認識した上で環境教育のところに別物としていくというよりも、むしろ先ほどから1部、2部通してあったと思うのですが、事業活動そのものが子供たちの学びにもなるし、そのことを伝えることが我々の学びにもなるということでいうと、そんなに本業から離れている

Hosei University Repository

話ではないのではないかなと思います。

○コーディネーター　　ありがとうございました。
塩田さんにお尋ねさせていただきますが、コーディネーターの役割で大事なことは、1つは、学校のことがよくわかっている人が必要。もう1つは、資金面。この2つがかなり重要なのではないかという話がありました。
確かに資金面が私も非常に大事だと思うし、フロアからもその質問が出ておりまして、実際に学校側から資金提供を受けるということはなかなか難しいでしょう。そうすると、今お話しの行政か、あるいは企業側だと思うのですが、その点、何といったらいいのか。価格表ということですが、何か目安みたいなものがあるのでしょうか。

○塩田　　価格表というのは、なかなか難しいですけれども……。
さっき資金というお話をしたのですけれども、基本的に活動自体はいろいろあると思うのです。例えば我々の事例でいいますと、相談が来る中でウェブ教材をつくったり、ビデオ教材をつくったりという場合にはそれなりのお金がかかる。ただ、最近多いのは、企業としてはお金ではなくて人を派遣します。皆さんには――私どもですけれども、プログラムをつくってください。私どもでやることは人を派遣して授業もやります。ただ、プログラムとか講師の教育というのですか。企業側の人が授業をする際の教育などを手伝ってくださいという場合には、我々はNPOですので、それほど利益性というものは追求しておりませんので、我々の事務局費ぐらいを出していただければいいということなので、例えば人的、人というものを資金として考えれば、それほど資金負担はないのかなと考えています。ただ、我々としては、事務局経費ぐらいをいただければ活動できるかなと考えています。

○コーディネーター　　とはいえ、5人の常勤のスタッフがいらっしゃるとなると、なかなか大変ですね。もちろん常勤というのもいろいろあると思いますが、それなりの規模が必要だろうと思うのです。その点は何か工夫されているのでしょうか。

○塩田　　これはいただけるところからはいただいて、いただけないところからはいただかないというのが基本的なスタンスでして、我々の事例を出させていただくと、例えば今読売新聞さんなんかは、環境教育とはちょっと違うのですけれども、教育支援部というのを立ち上げられて、教育に対してかなりお金と人とアイデアをつぎ込んで熱心にやっていらっしゃる。ことしですけれども、全国30ヵ所ぐらいで授業をされている。そういったところにはそれなりの規模を費やしてやる。ただ、お金がなかなか出せないのだけれども、アイデアはあるという企業からは事務経費ぐらいいただいて、一緒に授業をさせていただくというような形です。

○コーディネーター　　ありがとうございました。
梶野さん、先ほどの資料のご説明でいくと、地域教育プラットフォームというのはまさに第三者機関といいますか、企業を含めた外部の力がそこに結集して、第三者的な役割と

Hosei University Repository

して、いわば学校に注入していくというか、そういうプラットフォームをつくる。これ、非常にいい構想だと思うのですが、現実に今かなり機能していて、そうした外部の企業なりNPOが学校現場へ行く、行政として回転していると、そのように理解してよろしいでしょうか。

○梶野　　そう理解していただいて結構です。地域教育プラットフォームを立ち上げるための経費という形で、モデル的に3年間、杉並区、世田谷区、新宿区、小平市の4つの自治体に東京都が予算措置しています。

いずれにしても、地域の中でいろいろな学校と地域、場合によっては企業を結びつける優秀なコーディネーターの方たちがいらっしゃるという地区です。それ以外に自主的に都の考え方などもうまく取り入れてくださったところで、最近でいうと北区の方でもそういうコーディネーターが活動を始めましたし、学校単位でいえば学校支援のNPOということで、三鷹市さんというところで、そういう動きが徐々にではありますが動き始めている。これをいかに広げていくかというのが今の課題だと思っています。

○コーディネーター　　つまり、行政レベルでもそういう枠組みを用意して、行政側の仕組みでありますが、一応そういう補助金なりを出して、そういうプラットフォームを立ち上げる。実際先行事例もいくつか出てきたというのが今の実態だということで理解いたしました。

さて、ご質問をフロアからたくさんいただいておりまして、困っております。今、時間が5時8分ぐらいですので、どんなに延長しても5時15分ぐらいには終了したいなと思っております。これでも15分の延長でございます。そこでご質問いただいた皆さんにはまことに申しわけないですが、私の方で取捨選択させていただきましていくつか、3つ、4つさせていただきたいと思います。――よろしいでしょうか。

まず1つは、藤川先生はいらっしゃらなくなりましたか。藤川先生にご質問いただいた方は申しわけございません。

ごく簡単な質問なのですが、昌平幼稚園でのビオトープとか田んぼは区内にあるのでしょうか。それはどのぐらいの広さですかと、ごく簡単なご質問が来ております。

○竹山　　昌平幼稚園は、秋葉原の電気街にあります。そのため、区から特別に学校活性化支援事業ということで予算をいただきまして、小さな田んぼ、4メートル×3メートルぐらいでしょうか。それから池も2メートル四方ぐらいの小さなものなのですが、つくっております。東京農業大学の先生のお力をかりながらつくりました。

○コーディネーター　　ありがとうございます。

さて、次のご質問に移ります。これは、むしろ先ほどの実践事例でお話しくださったお二人の方がいいかもしれませんが、子供たちに教育をしたときに――あるいは竹山さんがいいかもしれませんが、子供たちの後ろに親御さんがいらっしゃる。そうすると、環境教育をしたときに、その後、子供たちから直接的な反応なりレスポンスがあると思うのですが、親からそのことについてどんな反応があったでしょうか。こういう問いかけがありま

Hosei University Repository

したが、竹山先生、その点はどうですか。

○竹山　　実は子ども達だけではできないので、保護者や地域の方の協力を得ております。そのため、お母様方や地域の方も非常に田んぼに対しての関心も高いですし、また子供もご飯を残さなくなったという話が出ましたね。お米を研いでいるときに一粒でも落とすと、「お母さん、これはね」って逆に子どもからいわれて、私もはっとさせられましたという話を聞いております。

○コーディネーター　　わかりました。
それでは、次のご質問に移らせていただきますが、親のことでいけば九段中等学校の事例では、浜谷さん、いかがでしたか。

○浜谷　　特にございません。

○コーディネーター　　そうですか。本当は掘り起こしという意味では、子供たちだけの壁新聞に加えて、親からも何かレスポンスが聞けたらよかったかもしれませんね。わかりました、ありがとうございました。
もう１つ、これは本質的な質問なのですが、子供たちに教育をするのはいいのだけれども、まず大人に教育しなければいけない。つまり、実践共同体への参加というのが、先ほどの塩田さんの正統的周辺参加論でしたか、という考えがあります。つまり、実践をしている共同体があって、そこに子供たちが入ってくるのだ。ところが、実践しているというのは大人なり、企業なりがあるわけですよね。まず、そういう実践共同体をつくることはどのようにしたらいいでしょうか。そういう趣旨でのご質問が来ているのですが、先ほどの概念図からいくと、塩田さん、その点どう考えたらいいのでしょうか。

○塩田　　実践共同体は、どのようにつくればいいかと。

○コーディネーター　　どのようにとらえたらいいかということでもいいかもしれません。

○塩田　　親というように少し焦点を絞ってお話しさせていただくと、確かに環境教育は親に対して――何でもそうなのですけれども、例えば今、キャリア教育とか食育という話がありますが、子供より親が先なのではないかという話をよく聞くのです。
確かにそのとおりで、我々も親に対して何かやらなければいけないなとは思うのですけれども、先ほどの幼稚園の例のように、子供にまず何かを伝えていくことで親が変わっていくというところもあると思うのです。その辺を我々ＮＰＯとしては、まず子供から変えていって、それで大人を変えていく。なかなか背景としては、親が変わりにくいという面もあるのですよね。親に何かを伝えたとしても、親がすぐ変わるということはないのですけれども、子供に教育していくことによって、子供が親になったときに環境に対してよくできる。いい行動ができるのではないかということを考えています。
親という考え方もあるのですけれども、まず子供から変えていって親に影響させていく。

Hosei University Repository

先ほどのお米を残さないというのはいい事例かなと思っているのです。そういった子供たちが、将来、実践共同体の中心を担っていければなと考えています。

○コーディネーター　　大人の社会、大人の集まりである企業がどう思っているかということなのですが、これは浜谷さんか、山村さんか、どちらでもいいのですが、社内で社員に対して環境研修なり環境教育をされているのだろうと思うのです。そういう点は、具体的にどんなことをされていますか。山村さん、いかがですか。

○山村　　私たちがやっているのは、通常の集合研修みたいなのをやっているのが1つと、もう1つは、先ほど西宮のLEAFの事例をそのまま会社の中にもってきたみたいな話なのですが、ボランティア活動をするとマイレージでポイントがたまる仕組みがあります。

結局、そういうものをなぜしているかというと、これは私たちの会社が競合他社にシェアで破れて、そのときに社長が何といったかといいますと、私たちは競合に負けたのではない。お客様の信頼をかち得られなかったから負けたのだ。だから、もう一回、ちゃんとお客さん側を向いて我々は事業活動をしなければならないという宣言を出したのですが、その宣言のときに、私たちのようなセクションがいかにして事業所ですとか、社員を社会に向けていくかということを考えて、今のようなマイレージ制度をつくったりして、結局、企業の中でISOだとかで教育する部分はもちろんあるのですけれども、むしろ社会から教えてもらうという機会をどうやって意図的に、さりげなくつくるかということがとても大事だと思います。

○コーディネーター　　今、まさにお答えいただいたことに関連して、実はそのお答えを予期するかのような質問があったのです。つまり、CSRを使命として取り組むのはわかるけれども、メリットはどのように感じているのか。あるいは、会社としてCSRに何を期待しているのか。そういうご質問があったのですが、まさに今のようなお話ということなのでしょうか。

○山村　　CSRを語るときに、私たちのようなアルコール飲料企業ですと、例えば未成年者飲酒防止ですとか、飲酒運転防止というテーマで物事をみてしまいがちになるのですが、実は社会の中にある自分たち企業のありようを定めていくためにも、おかしくないよねということを常にフィードバックをやりながら、自分たちのバランスをとっていくことが必要なのではないかなと思うのです。

そのときに必要なのは、むしろ先ほど申し上げたテーマというよりも、いかにして社会とコミュニケーションをちゃんととれるかということだと思いますので、企業が将来的にも存続できるためには、今のような社会性をもたないと企業が存続できないということですから、短期的な考え方と長期的な考え方といろいろあると思いますが、決して企業においてはデメリットではないし、むしろそれをやらないと企業は残れないと思います。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

まだまだご質問はたくさんいただいておりまして、これはちゃんと記録に残しますので、

Hosei University Repository

あわせて、この後、交流会がございます。場合によっては交流会の場で直接パネリストなり報告者の皆さんも何人か残っていただけますので、お尋ねしていただくということで、大変恐縮ですが、フロアからいただいたご質問についてはこのくらいにしてまとめさせていただきます。

さて、もう時間がありませんけれども、最後に何かご発言等がございましたら、梶野さんから一言ずつ感想なりをいっていただいて、そして終わりにしたいとおもいます。よろしくお願いします。

○梶野　　きょうはどうもありがとうございました。

新しい今日活動、つまりポスト工業化社会における学びを意識的につくり出せるような核となる人がそれなりに地域の中にいることを日々の仕事を通じて実感しています。この動きをもっと都内全域に広げていけるようにがんばっていきたいと思います。

きょうは、どうもありがとうございました（拍手）。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

続いては、塩田さん、どうぞ。

○塩田　　最後に一言、お話しさせていただくのは、先ほど私、課題として教育の知識をもつ人をどう取り込んでいくかという話をしたのですけれども、その1つの回答として、私は3つポイントがあるかなというように、ちょっと足早に申しますが、1つは、まず教育委員会に話をしていくこと。そして1つは、我々のような教育学部をもつ大学にお話しいただく。最後は、教員をリタイアされた方。定年退職ですとか、最近、非常に多くなってきておりますので、そういった方をうまく巻き込んでいくと、学校の中と企業とがうまく連携した授業づくりができるのかなと考えています。ありがとうございました（拍手）。

○コーディネーター　　ありがたいご指摘をありがとうございました。

それでは、山村さん、どうぞ。

○山村　　最後に、シートを出していたのでいわなかったことを簡単にいいますと、NPOを作ってきたところにかかわった、今もNPOの理事をしている立場でいうと、例えば企業と学校現場をつなごうと思うと、企業のことをわかってくれるNPOであってもらいたい。そうするのであれば、そのように企業のことをわかってもらうNPOを一緒に企業が育てればいいのではないかと思います。でき上がったものに後から入るよりは、でき上がる過程に入った方が、よほど企業にとってはメリットがあると思いますし、それから、そのことを地域の仕組みとしてやっていこうというようなことになってくると、これは行政のかかわりが欠かせないだろうと思います。梶野さんのようなお考えでもって行政が半ば仕組みをつくりながら、いろいろな主体がうまくかかわれるようなものがあれば、企業も非常にかかわりやすいなと思います（拍手）。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

Hosei University Repository

それでは、竹山さん、最後になります。

○竹山　　心豊かで、自然の仕組みや現象を自分なりに調べたりできるような子供を育成するためには、本当に自然科学から社会科学まで幅広い分野に及ぶと思います。幼稚園単独ではできないことも、企業、住民、行政、学校、力を合わせて取り組んでいくことで実現していけると思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございます（拍手）。

○コーディネーター　　ありがとうございました。

さて、最後に一言だけ申し上げて、このパネル討論を閉じたいと思います。千代田学の3年間は、千代田区というフィールドを生かしながらいかに環境問題を掘り下げて、そしてより豊富なものにしていくか。こういう課題を取り上げました。とりわけ教育ということをテーマに、地域の中で多様な資源を使って、いかに環境教育を豊富なものにしていくか。こういうことの作業に携わってまいりました。3年間を振り返ってみると、随分大きな成果が出たように思いますし、他方でやり残したこともあるかと思います。

きょうの討論の中で、私、非常に印象に残ったことは第三者機関の役割とあり方です。地域、その地域の中には、例えばさまざまな住民や企業、あるいは学校、そして行政があります。そこを結ぶ第三者機関の重要性が改めて確認できたなと思います。今回の環境教育のことでいえば、環境問題の専門性をどうやってわかりすく翻訳をし、教育の場にもっていくのか。例えば企業が地域に開くとすれば、その地域の開かれた企業の活動に対して、どうやって今度は地域の中に入っていくのか。そこをつなぐNPOが両方に必要である。こういう第三者機関の重要性を改めて確認できたし、しかし、そこのところをもう少し課題なり、あるいは問題点といったことを整理してみないといけないかなと思いました。

まだ課題が残っておりますけれども、パネルディスカッションというのはいくつかの課題を確認することが討論の目的の1つでもありますので、課題は課題として受けとめながら、またさらにこれを発展させていけたらなと思います。

本日は司会の不手際もありまして、予定の時間を20分ほど超過してしまいました。最後までご参加いただきましたフロアの皆さん、本当にありがとうございました。これでパネル討論を終わります。どうもありがとうございました（拍手）。

○司会者　　ありがとうございました。

最後に、本日のシンポジウムの締めくくりといたしまして、3年間にわたり千代田学を支え続けていただきました千代田区を代表いたしまして、千代田区環境土木課の山﨑芳明様より閉会のあいさつをいただきたいと思います。

Hosei University Repository

第6節　ご挨拶

千代田区　環境土木部　山﨑芳明部長

皆さん、こんにちは。只今、ご紹介いただきました千代田区役所環境土木部長の山﨑と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は環境教育にかかわる企業のCSR活動についてのシンポジウムということでお招きいただきまして、まことにありがとうございます。法政大学地域研究センターさんにおかれましては、区内企業のCSR活動の実態調査や、その中で特に企業の環境教育支援について実証実験を含め、研究を進められてきました。本日、その研究成果が発表され、企業が行う環境教育について基調講演や、事例報告のほか地域特性を含めまして、さまざまな視点から意見が交わされたということにつきまして大変意義深いことと認識してございます。

取り組み事例でのご報告にもありましたように、よりよい地域環境を築いていくには、地域社会の構成員でございます企業や大学生の方々が参加していくということが不可欠というようになります。今後、企業の皆様方が環境対策ですとか、あるいはCSR活動に取り組んでいく上で大変参考になったのではないかと思います。

ところで、今回の調査研究が千代田学のプロジェクトで行われたということでございますが、そもそも千代田学というのはどういうことかについてちょっとお話ししたいと思います。

区内には、ご案内のとおり多数の特色ある大学がございまして、各大学は近年実践的な教育や、あるいは社会貢献、地域貢献に力を入れてございます。一方、本区では、住み、働き、学び、集う人々とともにまちづくりを進めていくということを基本としておりまして、中でも大学等に対しましては、本区のまちづくりの大きな力として期待しているところでございます。

こういった状況を踏まえまして、平成15年に千代田区と区内にございます11大学との間で、都心の魅力にあふれ、文化と伝統が息づくまち千代田の実現を目指し、相互に連携協力するということでの基本協定を締結いたしました。その後、平成16年に千代田区に関するさまざまな事象を1つの学問として学ぶこと。これを千代田学と呼んでいるわけでございますけれども、この千代田学の確立と、それから千代田学が区政の進展に寄与するということを目的といたしまして、区内大学等が自ら行います千代田学に関する調査研究事業に対しまして、その経費の一部を区が負担するという事業提案制度を設けたわけでございます。これまで3年間、行いましたけれども、9つの大学、24のテーマについて実施されてまいりました。法政大学さんにつきましては、制度発足の年から本年度までの3年間にわたる調査研究ということで、毎年度、審査の上、助成をさせていただいたという次第でございます。今後も区内大学等におかれましては、千代田区にかかわるさまざまなテーマの調査研究事業につきまして、この千代田学の事業提案制度を活用いただきたいと思ってございます。

最後に、本日は環境が1つのテーマとなってございますので、本区における環境の取り

Hosei University Repository

組みについて簡単にご紹介と、それからお願いをさせていただきたいと思います。

現在、本区では地球温暖化対策の取り組みということで、ことしの秋を目途に本区の地域特性を踏まえた地域推進計画の策定。それから、その計画の実効性を高めるということで、関連条例の制定について今検討しているところでございます。計画に当たりましては、各方面のご意見をいただくということで懇談会を設置しておりますが、その座長には、先ほどパネルディスカッションのコーディネーターをされた田中充先生にお願いしているところでございます。

一方、環境問題は、こういった計画に基づく事業の規制ですとか誘導。これも大事なのですけれども、そのほかに個人や企業等の皆さんが、自ら環境に配慮した行動をとっていただくということも欠かすことができないわけでございます。その仕組みの1つに、これはご案内のとおり現在、ISO14001というのがあるわけでございますけれども、経費の面や、あるいは煩雑な手続等で大きな企業でないとなかなか取り組みにくいという問題がございます。

そこで千代田区では、もっと簡単に環境配慮行動に取り組んでいただくようにということで、千代田区独自の環境マネジメントシステム。これはＣＥＳと呼んでございますけれども、その構築を現在進めております。CESは、中小企業を対象としたクラスⅢ、それから個人商店等を対象とするクラスⅡ、そして区民のみならず本区の特性でございます昼間人口85万人を含めた個人を対象とするクラス1で構成してございます。個人を対象としたクラスⅠの仕組みにつきましては、こちらも現在、法政大学の学生の皆さんと協働して取り組んでいるというところであります。CESにつきましては来年度スタートというように予定してございますので、本日お集まりの皆様もぜひ参加いただきたいなと思ってございます。

また、CESを運営していくための事務局でございますけれども、当面は千代田区、それから法政大学のCESゼミが当たっていきますが、いずれは区民や企業の皆さんにも参加していただきまして、第三者機関ということでつくりたいと思ってございます。企業の皆様にとりましては、これもCSR活動の一環につながるのではないかと思ってございますので、よろしくお願いしたいと思います。

いずれにいたしましても、環境問題は地球規模で考え、行動は足元からといわれておりますように、お集まりの皆様には本日のシンポジウムを通じてともに歩み始めていただくことをご期待申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

○司会者　　山﨑様、ありがとうございました。

これをもちまして、千代田学シンポジウム[CSR活動としての企業の環境教育支援」を終わらせていただきます。